

共同研究 半七捕物帳（一）

序

「お文の魂」小考

浜田雄介
井上崇

「石燈籠」小考

菅井九一郎

「半鐘の怪」小考

加藤文明子

「帯取りの池」小考

金子莉絵

「春の雪解」小考

古屋麻衣

「朝顔屋敷」小考

蔡維鋼

「猫騒動」小考

松浦光

序

浜田雄介

これは、成蹊大学大学院文学研究科日本文学専攻の平成二十二年
度「近代文学演習B」に始まった共同研究の最初の成果である。

当初の取り決めは、岡本綺堂の『半七捕物帳』に収録されている
個々の作品を各自が取り上げて論じるという、ごく簡単なものであ
ったが、それを提案したのは私、演習担当教員の浜田である。私の
モチーフがそのまま共同研究の目的となつたわけではないが、その
時に述べた提案理由はここにも記しておく方が理解を得やすいかも
しれない。

平成二十一年度、私は成蹊大学より一年間の学外研修を許され、
四月から十月まではコロンビア大学東洋言語文化学部、十一月から
三月までは立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターに、それ
ぞれ客員研究員として籍を置いた。その前半、長期にわたる国外滞
在中、あらためて実感したのは日本との微妙な季節感の違いであり、
それが何にもとづくものかと考えるうちに、ふと捕物帳の問題に行
き当たった。

「季の文学」という、一九四九年に白石潔が捕物帖に付けたキャ
ッチフレーズがある。定義の曖昧さ不確かさを指摘されつつ、滅び
もせず生き残っている言葉だが、そのこの意味は、今日の視点
であらためて捉え返してもよいのではないか。そんな風に考えが進

んだのは、ちょうどその頃、コロンビア大学のシラネ教授や鈴木教
授との交遊の中でエコ・クリティシズムと呼ばれる批評原理に接し
たことにも起因している。

そもそも捕物帖は、その流通量の多さにも関わらず、文学史的に
は適切な扱いがなされてこなかったように思う。文学ジャンルとし
ては大衆文学に属し、時代小説と推理小説の境界領域に位置するこ
というのが常識的な認識であるうが、そのような分類整理からは、ジ
ヤンルの史的意味も作品の価値も見えてこない。整理に過ぎない以
上、大衆性や謎解きといった視座による大衆文学史、推理小説史で
は、どうしても周縁に追いやられるであろう。大衆文学や推理小説
が目的を持った文学運動として始動する以前に成立した捕物帖を捉
えるには、以後に成立する枠組みをいったん廃棄する必要があるの
ではないか。

大正以後の時代に江戸時代の事件を描く捕物帖の多くにおいて、
なぜ季節の描写が濃厚にただようようになったのか。季節の問題は
かりではない、動物や植物と言った自然の怪異が生きていた時代を
描くとはどういうことなのか。そのドラマツルギーが謎解きの形を
とるとしたら、それは探偵小説の謎解きとはどこかしら異なるもの
だったのではないか。

平成二十二年一月九日、十日に立教大学で行われた国際シンポジ
ウム「エコクリティシズムと日本文学研究 自然環境と都市」でパ
ネラーの席を与えられた私は、『半七捕物帳』をとりあげて右段落の
ような問題意識を表明した。そして同四月、成蹊大学大学院演習で

同様の趣旨を話し、ただし各自は必ずしもこれに連動する必要はない旨も確認した上で、大学院生に具体的な作品研究を呼びかけたのである。

先行研究については、近代文学研究プロバの世界でも少数ながら優れた論考があり、またいわゆる近代文学研究以外の領域においてより多く、尊敬すべき仕事が集み重ねられている。ここに詳しい研究史を記すことはしないが、捕物帖研究については一井襄の一連の考案があり、縄田一男の仕事があり、演習進行中には野崎六助も一書を上梓した。『半七捕物帳』については近年では何よりも今内孜の名著『半七捕物帳事典』があり、また浅子逸男や横山泰子らの研究があり、遊れば岡本経一や今井金吾をはじめ、名前を挙げきれないほどの人々の仕事の研究地盤を支えている。和井府清十郎「綺堂事物」を筆頭とするウェブサイト上の研究も決して軽視できない。

これらの蓄積を前にして、研究の緒に就いたばかりの私たちのしよつとしてゐることは、恥と恐れを知らない試みかもしれない。大学院生は良くも悪くも大学院生であつて、研究者としてはまだ駆け出し、捕物帖研究については全くの素人である。指導する立場の私も、これと大差はない。だが院生も教員も、駆け出しではあつてもやはり大学院で文学を学ぶ者であり、大学院のせみらしく、文学として捕物帖を読み、論じること、かえつて意味のあることも、きつとあるだらう。

そのような方針を確認し、実際の作業は岡本綺堂『半七捕物帳』(『光文社文庫』新装版、平成十三年十一月)に収録された作品

の中から各自が一作品を選び、大学院演習授業で発表を行うことから始めた。そこでの討議を踏まえて各自が論文形式にまとめ直し、やはり相互批評によつて形式の統一や文章の推敲などを行ったのが本共同研究である。とはいえ、最終的に各論考の責任がそれぞれの執筆者に帰属することは言うまでもない。

振り返つて見れば、各論考には私も教えられるところが多かつた。先に記したモチーフに重ねて整理すれば、井上論文は「お文の魂」の入れ子構造と各世界の季節・天候と事件との連動を論じ、古屋論文は「春の雪解」に怪談と探偵小説という二つのドラマツルギーを絡ませる雪の描写をたどる。蔡論文は「朝顔屋敷」の事件が朝顔の生態と重なる「一日事件」として設定される意味に迫り、松浦論文は「猫騒動」に人口過密な江戸の住民トラブルを読み、加藤論文は江戸という町の夜の闇を描くものとして、「半鐘の怪」の半七の不在を意味づける。それぞれ、季節や動植物の怪異が生きていた江戸の町を描くものとして捕物帖の表現を検討する論考である。また、菅井論文は先行歌舞伎作品を「石燈籠」に重ねることで悪女の悲しさを読み解き、金子論文は「帯取りの池」の嫉妬にかられる女や未熟な手下を巧みに操る半七の笑いに着目する。これらは江戸を舞台に犯罪や悪を描く捕物帖のドラマツルギーにかかわる考察と言えるだらう。以上は私のモチーフによる整理だが、各論考の読みどころは読み手によつて多様に発見されよう。

大学院演習の発表では他にも多様な論点が提出され、討議も多岐にわたつたが、論文化にあつては枚数上の遠慮もあるので、極力

焦点を絞ることとした。従つて、作品論としては必ずしも十全なものとはなっていない。あえて切り捨てた論点も多く、それについては各自がそれぞれに別途展開の方策を考えるであらう。また、論考の不備が読み手の新しい発見を生むこともあれば、それも幸いに思ふ。

『半七捕物帳』本文の引用については先に記した光文社文庫版を用い、諸本の異同について網羅的な調査はできなかつたが、初出初刊をはじめ現段階で可能な限りのテキストは参照した。参考文献等については必要に応じ各稿の末尾に記したが、すべてに共通する今内致『半七捕物帳事典』（国書刊行会、平成二十二年）については、まず確認すべき基礎的資料として個別には掲げなかつた。謝意を記しておきたい。また、各論考はそれぞれ扱った作品の謎解きや結末に触れている。未読の方はご注意を願う。

注

(1) 白石潔『探偵小説の郷愁について』（不二書房、昭和二十四年二月）

(2) 立教大学大学院文学研究科日本文学専攻主催、青山学院大学文学部日本文学科・コロンビア大学東洋言語文化学部共催。概略は勉強出版から近刊の『アジア遊学』に掲載予定。

「お文の魂」小考

井上 崇

本作「お文の魂」は、岡本綺堂の作品『半七捕物帳』の第一作であり、初出は大正六年の『文芸倶楽部』一月号（改造社）、綺堂生前の改稿を経て主人公・半七にとつては四十九番目の事件となる。

本作は後の作品と異なり、物語の語り手である「わたし」と事件を語る半七老人が出会う以前の物語で、まだ青年であつた「わたし」に事件を語ってくれるのは「わたし」の父の知人であつたKのおじさんである。そして物語は、それから二十年後（改稿前は十年後）に「わたし」と半七老人が出会つたことを示唆して終わる。

本作中で語られる事件のあらましは次の通りである。

元治元年、事件は旗本である武家に嫁いだ女とその娘のもとに夜な夜な女の幽霊・おふみが現れることに始まる。初め、周囲の者は過去の怨恨から来るものと考え、様々なことを試すが要を得ない。そのうちに噂は街中に広がり、事態を收拾するために依頼を受けることになつたのが、Kのおじさんであつた。しかし彼もまた、おふみについての手掛りを全く得られはしなかつた。そのとき頼つたのが半七である。半七は二三の質問から、たちまちに事件を解決し、事件は母子の情愛よるものと判明する。しかしながら、彼らは事真相を隠すともにおふみの噂を絶ち消えにするため、表向きにはおふみの追善供養を行ない、事態の收拾を図つたのであつた。

本稿では、この『半七捕物帳』の第一作「お文の魂」について、季節や時候・科学・物語の枠組みと云った三点に焦点を絞り、考察を行なつてみたい。

季節・時候との連動

本作「お文の魂」では季節の表現は少ないものの、作品の流れに季節への言及が大きく関与している事がわかる。

この事件の時候は春から夏へと季節の変わり目であるが、事件発生の三月の初旬では、「その晩は月の陰くもった暖かい夜であった。」「や」閉め込んだ部屋のなかには春の夜のなまあたたかい空気が重く沈んで、「と云つたように春の風景表現が見られはするものの、その雰囲気は怪談によく見られるような重苦しい風景描写が中心である。

それに対してKのおじさんと半七が一緒に謎を解いていく件（始まりは三月の終わり）では、「小幡の屋敷の八重桜にも青い葉がもう目立っていた。」と描かれている。更にその後の貸本屋において謎が半分解けた浄円寺への道すがらでは、

半七は先に立つて歩いた。二人は安藤坂をのぼって、本郷から下谷の池の端へ出た。きょうは朝からちつとも風のない日で、暮春の空は碧あおい玉を磨いたように晴れかがやいていた。

火の見櫓ひのみのりゆうの上には鶯うすが眠つたように止まっていた。少し汗ばんでいる馬を急がせてゆく。遠乗りらしい若侍の陣笠のひさしにも、もつ夏らしい光りがきらきらと光っていた。

というように謎の解明が進むにつれ、季節の描写が明らかに明るいのへと転じていく事がわかる形になっている。

これは、事件の時間軸の外側にある語りの時間軸でも言えることであり、物語序盤の「わたし」にKのおじさんが話を始める場面で、「わたしが学校から帰る頃から寒い雨がそぼそぼと降り出して、日が暮れる頃には可なり強い降りになった。」「時々ときに兩戸をなでる庭の八つ手の大きい葉に、雨音がびしゃびしゃときこえるのも、外の暗さを想わせるような夜であった。」と云つた怪談めいた描写であるのに対し、語り終わった場面では、「この話の済む頃には夜の雨もだんだん小降りになって、庭の八つ手の葉のさわめきも眠つたように鎮まった。」と云つたような語りの終わりを提示している表現と取れる天候の描写が見て取れるのである。

つまりはKのおじさんが「わたし」に語ってくれた、「怪談めいた重苦しい春」から「光眩しい碧い夏」へと変化する事件の時間軸構造の外側に、「怪談めいた薄暗い雨降る夜」から「穏やかな雨上がりの夜」に変化していく語られる時間軸の構造が形成されているのである。そして、その内側に存在する事件の時間軸における季節の変化が、外側に位置する語りの時間軸における時候の変化へと連動しているのである。

結果として、この謎解き物語としての明から暗へと云う流れが、各々の時間軸における季節や時候の明暗に連動する形でこの「お文の魂」と云う物語の世界が構成されているのである。

「科学」的意識

では次にその謎への登場人物たちの視点を見ていきたい。

本作中には、ある種「科学」と云われる類への意識が多く見られる。

例示すれば、冒頭で登場するおふみの話（わたし、十二歳）であるが、その話を遮るのは「わたし」が学校教育で学ぶ物理学と数学であり、これは近代教育の流れと考えられる。

また、Kのおじさんが「わたし」に事件の顛末を語り始める場面では怪談のイメージを掻き立てる周囲の描写にも関わらず、

おじさんは私を相手にして、ランプの前で一時間ほども他愛もない話などをしていた。時々には雨戸をなでる庭の八つ手の大きい葉に、雨音がびしゃびしゃときこえるのも、外の暗さを想わせるような夜であった。

殊に年来の疑問になっているおふみの一件を測らずもおじさんの方から切り出したので、わたしは思わず眼をかがやかし、明るいランプの下ならどんな怪談でも怖くないというふうにならざと肩をそびやかしておじさんの顔をきくとみあげると、しいて勇氣をよそおうような私の子供らしい態度が、おじさんの眼にはおかしく見えたらしい。彼はしばらく黙ってにやにや笑っていた。

と云うように部屋の中は明るい「ランプ」の灯る空間とされている。

前述した二文を見ると、前者で夜（怪談とも言える）を「わたし」に意識させるのは「雨戸をなでる庭の八つ手の大きい葉」や「雨音」と云った聴覚的なものであり、「ランプ」は視覚的な要素として夜を無視させる役割を担っている。更に後者において、「わたし」は「ランプ」の明るさによって怪談としての物語を否定するとともに、Kのおじさんにとっては後述の引用部ように全く怪談としての要素を払拭する象徴として「ランプ」が用いられているのである。

これは、時間帯や天気が醸し出す状況に引き摺られる迷信や怪談と云った非可視の事象に隔ちられるだけではない、「ランプ」と云う物体を通じたある種の「科学」への意識が垣間見られる描写であり、この物語が「謎解き」であると云うことを表す要素と考える事が出来るのである。

このような視点で事件の顛末を見ると、物語の主軸である武士・小幡伊織やその義兄・松村彦太郎は、それぞれの妹であり妻であるお道の訴えを信ずるべきものとしては取り扱わないものの、その詮議は家の古池や井戸を掘掘し、女の念の籠もる対象を探すほか、お道とお春に見た夜の騒動を「生きた証拠」と考え、「売卜者」の予言を基に屋敷の構を切り倒すなど、「非科学的事象」を否定しながらその詮議の蔓は「非科学的事象」から「非科学的原因」を追究しようとするのである。

そして、「この「非科学的原因」の究明は同じくKのおじさんにも

見られ、おふみの正体を過去の小幡家に仕えた奉公人に見出し、その帳面を限なく確認する行為などが挙げられる。

これは問題の解決策についても言えることであり、「どうだろう。うまくその幽霊の正体を突き止める工夫はあるまいか。幽霊の身許が判って、その法事供養でもしてやれば、それでよからうと思うんだが……」と云うように、「非科学的原因」に対して、「非科学的解決」に頭を巡らしているのである。

それに対して、事件を解決に導く物語中の半七の考え方は「幽霊はほんとうに出るんでしょうか？」などと、詮議の中から最初に「非科学的現象」を省く考え方をするように論考が行なわれている。

しかしながら、この意識はKのおじさんの考え方にも多少反映されている部分が見られる。それはKのおじさんが詮議を始める場面において、「昔話の綱や金時のように、頼光の枕もとに物々しく宿直を仕るのはもう時代おくれである。」と思考を巡らすなど、これは古い怪談物のような物語の流れを時代遅れな長物として否定する行動パターンと考えられるものであるが、この意識については形の違うものながら、多少なりともその解答を導く半七の姿にも見られる部分なのである。

ここで、物語に登場する男たちを通して本話における「科学」と云うものに対する思考を考えてみたい。本作における男たちの思想は一貫している。それは、幽霊など存在はしないと云うことである。

物語の中心となる小幡家であるが、世間では幽霊の噂が流れるものの主人の伊織は実際には信じておらず、前述の通り、お道の訴え

に耳を傾ける形で幽霊を追いかけることになる。これは事件において「非科学的現象」を追いかけたKのおじさんや、後に話を聞いて不思議に思う「わたし」の叔父も同様である。

本作は終盤において、半七の活躍によって明らかになったこの事件の背後にあるお道のお春に対する母の情愛を知った小幡伊織とKのおじさんが、松村彦太郎と周囲の者に事の真相は語らずに草双紙の登場人物でしかなかったおふみの供養と云う「非科学的現象」を行なうことで今回の騒動の着地点を見出し、事態を解決に導くと云う筋を取るが、この解決の方法は真実を知らない武家の関係者から街中の人間全てが納得できるものとして描かれている。

現代で考えればこの「非科学的」な軟着地は納得出来るものではない。しかし、これが江戸の物語世界において解決として扱われるのである。その根幹には、文中にも記されている「武士たるものが妖怪などを信ずべきものでない」という武士的教育の感化」の存在が大きく影響しているものと考えられる。本件においては実害ある幽霊の消滅こそが火急の要件なのであり、それが「非科学的解決」によって避けられたとしても良いのである。だからこそ、「昔話の綱や金時のように」などと云う「説や」、「しかし世の中には解らないことがある。あのおふみの一件などは……」と語る「わたし」の叔父の言葉があるのである。

これらの江戸の人々の論法（作中においては半七を除く）は、半七の幽霊の存在を疑問視し、それを解いていく姿とは大きく対立するものであり、「ここにあるのは「科学的」な論考の差異である」。

また、半七の「薄墨草紙」の発見とKのおじさんについても、おふみの存在を見定めようとした行動は、動機は違えど同じものと言えるが（双方ともに本作中において、奉公人の出入り帳や貸本屋と云ったものからおふみの存在を可視出来るものとして探そつとしてゐる）、そこで大きく異なるのは知識と経験である。Kのおじさんは出入りの請宿の帳面の「煤けた紙に残っている薄墨の筆のあとを根好くたど」ることまでしてもおふみの存在を確認できないのに対し、半七は「薄墨草紙」の存在を時の流行からするりと見つけ出してしまふのである。それは以降の事件の流れにも見られ、お道の行動の原因となつた浄円寺の住職の一件では「延命寺の二の舞」の一言で住職の女犯を暴いてしまつと云つた場面も同様である。

以上から、本作で扱われた事件には「古くからある怪奇への意識を持つた人間たち」（小幡家・松村彦太郎・「わたし」の叔父さん）と、「変わりつつある新たな時代の意識と旧来からの意識の狭間にいる人間たち」（Kのおじさん）、「新たな時代の意識と旧来の意識とに折り合いをつけた人間たち」（半七）の三つの人間の層が見られるのである。

「古くからの怪奇への意識を持つた人間たち」は奇怪な事件そのものを怪奇として扱い、古くからある思考の中で事件の解決を目指す。それに対して、半七はこの事件が怪奇なのか、それとも偽証されたものなのかを意識し、提示される背景と自身の知識と経験を用いて謎を解決に導くのである。しかしながら、事件の決着についてはその周囲の人物たちに一任してしまふ。ここには、人間・半七が

旧時代と新時代のその間に存在している人物であると云うことが大きく影響するのである。

更に言えば、Kのおじさんと云う人物像は、思考は新しくとも旧時代と新時代の狭間に生きる半七と、旧時代の世界に未だいる人間たちの間に発生する更に境界とも言える場所に描かれているのである。思考も存在も旧時代と新時代の狭間にある浮舟のようなものなのである。だからこそ、彼は「高等遊民たらしめ」られているのだらう。

そして物語が語られ、発表された場において、この三層構造が江戸から明治に変わりつつある淀みない時代の移り変わりを一つの事件の中に描き出しているのである。

時と季節の移り

前述のように、この物語には様々な構築をもつ物語世界が埋め込まれている。それらをまとめると、「古くからある怪奇への意識」から発生する江戸時代の事件は「その古い意識から派生した意識」と「新たな時代の意識」によつてその着地点へと導かれ、その外側には「怪談めいた重苦しい春」から「合理的」に解決された「光眩しい碧い夏」への季節の物語が語られている。更にそれと連動する形で、物語が語られた明治の世界では「怪談めいた薄暗い雨降る夜」が晴れるまでを描き、さらにそれは「わたし」と云つ主人公によつて大正の時代に語られた「推理物」の形を取るのである。これらを図にすると上のようになるだらう。

「科学」と怪談の入り混じる狭間の世界観

怪談めいた雨降る夜の入り口

怪談めいた重苦しい春

事件の発生とそれに対する古来のアプローチ

半七の「科学」を意識したアプローチ

八重桜にも青い葉の目立つ頃

謎の解決とそれを理解した上での合理的な決着

光眩しい暑い夏

穏やかな雨上がりの夜

事件に関わった人々の今（各々の合理とその折り合い）

戦争を終え、「わたし」と半七老人の昔語りは続いていく。

大正

明治

江戸

本作では江戸・明治・大正と云う三つの時代に跨る物語が描かれている。発生する事件は「古来よりある意識」によって解決される

ことは無く、「新たなる時代の意識」を用いた半七によって解決を迎える。しかしながら、事件の着地点として提示されるのは、その後にあつた人の想いや時代と周囲との兼ね合いから導かれる旧来のものに則つた合理的な決着の形である。ここに描かれるのは、時代とともに「変わったもの」と「変わらないもの」の両方であり、その時代の変化に伴う意識の変遷の両端を併せ持つ人物像として描かれた岡っ引き・半七を物語の中心に据えることで、理論と情愛を併せ持った時代に跨る物語世界が広がっていくのである。

そんな半七の样々に謎を解く姿とは、人の想いと合理性と云う「シャロック・ホームズ」のような新たな「今」の推理物語を提示しているように思われるのである。

注

(一) 本作は綺堂が狂生名義で執筆した「お住の魂」、『文芸倶楽部』明治三十五年四月号)が下敷きである。この点、養嗣子の岡本経一の証言があり、長浦由紀「岡本綺堂『お文の魂』論」『半七捕物帳』シリーズ第一作を読む」(『昭和女子大学大学院日本文学紀要』第九集、平成十年三月)の指摘がある。

「石燈籠」小考

菅井九一郎

「石燈籠」は『文芸倶楽部』大正六年二月号に掲載された連作半七捕物帳の第二作で、江戸時代の警察組織や半七の経歴などシリーズの世界観を支える基礎的な情報が多く盛り込まれている他、

私が半七老人から直接聞いた話として初めて紹介するものに相応しく、半七が十九歳の時に初手柄を上げた事件を取り上げている。彼の初手柄は他の役人や岡引が見落とした証拠を見つけ出し、自らの広い知見と照らし合わせて犯人にたどり着いたことによるものであり、ここには半七の高い捜査能力を見て取ることができる。しかし物語を読み進めていくと、半七の捜査活動は著しい滞りを見せることもなくスムーズに進展しているために却って印象が希薄になっている一方、悪役である春風小柳は、小柳として登場するのはほぼ結末部のみであるにもかかわらず、その悲劇的な最期から印象が鮮烈であり、物語の焦点は実は半七よりも小柳に多く向けられているように見える。そこで本稿では小柳の人物像や彼女をとりまく状況の整理を通じて、物語の焦点のより詳細な把握を試みることにするが、まずはその前段階として本作と歌舞伎作品との関係についての検討を試みたい。

「石燈籠」と「梅雨小袖昔八文」

「石燈籠」ではお菊の着ていた黄八文の説明の中で、「白子屋のお熊」、「芝居で見るお駒」などに言及される。この点については既に浅子逸男が「恋娘昔八文」の存在を示唆するものと指摘しているが、こつした「石燈籠」と「白子屋お熊事件」関連作品との関係を念頭において改めて作品を眺めてみると、「梅雨小袖昔八文」が本作の下敷きとして重要な役割を担っていることが見えてくる。

「梅雨小袖昔八文」（以下「梅雨小袖」と略す）は河竹黙阿弥の作で明治六年中村座初演の歌舞伎であり、白子屋お熊事件に取材する作品群のうち歌舞伎作品としては最も後に創作されたものであるが、現在にいたってもなお繰り返し上演される人気作である。作品の内容をごく簡単に紹介すると、未亡人お常が切り盛りする材木商白子屋が経営に行き詰まり、一人娘のお熊に持参金つきの婿を迎えることになるが、お熊は店の手代忠七と言い交わす仲であり、それを察知した出入の髪結である新三が忠七に勧めて二人を駆け落ちさせる。しかし新三は土壇場で忠七を追い払ってお熊を略取し、身代金とやくざ者としての功名を目当てに自宅に監禁。町の顔役である俠客源七が交渉に来るものの、やり込めて追い返し溜飲を下げる。ところが次に礼金目当ての強欲家主が交渉にあらわれると、家主の権限を振りかざされて歯が立たず、しぶしぶお熊を解放することとなる。とは言え、新三は大物源七をやり込めたことでやくざ者として売り出すことができたが、それを吹聴され顔を潰された源七は新三を深く恨み、ついにある雨の晩、閻魔堂橋で新三を待ち伏せして

これを斬殺。新三は非業の最期を迎える。⁽³⁾「梅雨小袖」初演ではこの他に、お熊の婿誤殺、彼女をかばう下女お菊の自害、お熊・源七らをお大岡越前守が寛大に裁く大団円などが盛り込まれていたが、初演以降は概ね梗概で示したような悪人新三を主軸とした物語として上演されたようである。

さて、この「梅雨小袖」と「石燈籠」との間には基礎的な部分に明らかな類似がある。例えば舞台となるのが未亡人の切り盛りする商家であること。その商家の一人娘が店の者と密かに通じていること。それに目をつけた悪人によって娘が誘拐されること。最終的に娘は救出され、一方の悪人は非業の最期を迎えること、などである。また細かい部分を挙げると、「梅雨小袖」には犯行後の新三がゆうゆう朝湯を浴びて粹な姿で帰宅する場面があるが、「石燈籠」にも湯を浴びた金次が小粋な風体で帰宅する場面がある。他方、誘拐された娘の監禁される場所が悪人の自宅の戸棚であること、悪人が命を落とす場所が橋であることなども共通している。

二作の関係について作者綺堂の直接の言及はまだ確認できていないが、『演劇画報』(大正四年四月号)の劇評では「梅雨小袖」を「何時見ても心地の好い狂言、空に時鳥が啼く、鯉魚売が来る、新三が湯上りの浴衣で帰つて来る、こゝろは黙阿弥翁専売の舞台で、学問や理屈ばかりでは追付ない妙味があります。斯ういふ芝居を書く人は既う二度とは出ますまい。」と激賞しており、「西郷山房随筆」(『舞台』昭和十年七月号)では明治二十六年に「梅雨小袖」を初めて観た際、事前に聴いていた芝居の原拠である春錦亭柳桜の人情斬

と比較したことを回想しているなど、この芝居が彼にとつて印象の深いものであったことは間違いない。こうした点と二作に目立った共通点のあることを合わせて考えると、「石燈籠」の下敷きとして「梅雨小袖」が用いられた可能性は高いものと思われる。

綺堂が「梅雨小袖」を下敷きにした背景には、恐らく当時ポピュラーであった名作歌舞伎を取り上げることで読者の興味を増そうという計算もあつたことと思われるが、それ以上に「梅雨小袖」を背景に置くことで悪役を焦点としたドラマを効果的に作り上げようとしたこともあつただろうと思われる。先述の通り、春風小柳は変装している場面などを除けば実質的に結末部にのみしか登場しない。悲劇的な最期を迎えることもありその印象は決して弱いものではないが、背景に悪役新三を主軸とする「梅雨小袖」を匂わせることで、読者の興味はより強く悪役に注がれ小柳の存在は更に強調される。またそれによつて、悲劇の本質を探る手掛かりとして小柳の内面にも注意が振り向けられるようになるだろう。綺堂の意図はこのあたりにあつたのではないだろうか。

春風小柳について

春風小柳は両国広小路の見世物小屋でいかがわしい芸を見せる女軽業師である。作中の記述によると三十歳前後であるが、十歳近く年下である金次と同棲していて、若い男に入れあげていると巷の噂にも上つており、誘拐・殺人を平気でこなしていることなどを単純に合わせて考えると、いかにも色狂いの凶悪粗暴な人物といった印

象を受ける。そうすると小柳の最期の悲哀というのは、単にその凶悪粗暴な人物が最期にしおらしく男との別離に涙を流したためのもとも思われるが、作中の小柳について触れている部分を細かく吟味して見ると、より明確に彼女の破滅の悲劇性を理解できるようである。

金次は詰め寄る半七に難なく屈して犯行のあらましを自白するが、その中で凶悪犯罪を犯す小柳が、「苦しまぎれによんどころなく斯んなことをするんだ」と漏らしたことを話している。彼女には自分達が人倫の一線を踏み越えた行為に及んでいるという自覚があったのであり、このことから彼女が単純な悪人として割り切ることのできない、ある程度の倫理感覚を持ち合わせた人物であることが分かる。ではそんな彼女が、なぜ「よんどころなく」一線を踏み越えることになってしまったのだろうか。

その直接の原因は、金次の自白からうかがえる経済的な行き詰まりにある。彼の話によれば、小柳は軽業師という派手な稼業をしていながら金遣いが荒く、その上金次も博打稼業がうまくいかないのが不景気であったために無理な借金が重なり、各種支払いの時期である歳末を迎えてついにやりくりが窮してしまった。小柳はこの窮乏を打開するためにお菊を誘拐して潮来に売り飛ばした上、その代金の受け取りまで間があったことから、目先の金目当てに菊村侵入を企てたのである。しかし、これはあくまでも直接の原因であり、この背景に作中から読み取れる小柳の心情を重ねると、犯行に及んだ彼女の胸にあつたのが単なるやりくり以上のものであったことが

分かる。それを探るために結末部を少し細かく吟味してみたい。

まず注目したいのは半七とのやりとりの中で小柳が涙を浮かべる場面である。半七の強い求めに応じて小柳は両国広小路の見世物小屋を出るが、素直に神田の吉五郎のもとには向かわず、拘留が長引いた時のための準備がしたいと称して自宅へ立ち寄ることを求める。しかし彼女が自宅へ立ち寄りたい本当の理由がそのような準備ではなかったことが続くやりとりから分かる。半七は彼女の心を見透かしたように「家へ帰ったって、金次はいねえぞ」と冷たく言葉を返す。すると小柳はそれまでの不敵な態度から打って変わり、立ち止まって眼に涙を浮かべるのである。ここで彼女が涙を浮かべるほどの悲しみを感じたのは、突然半七が金次を持ち出したことから、犯行の全貌が既に露見しており、それによって金次も共犯者として連行されたことを悟ったためであると思われるが、一方で彼女はここで見せた反応によって、半七の言葉が自身の心を的確に言い当てたものであることを証明することとなった。つまり彼女が自宅への立ち寄りを希望した真意は、準備などではなく金次に会うことにあるのである。

このことは小柳の続いての行動を理解する上で重要な意味を持つ。彼女は金次に会うために自宅への立ち寄りを求めた。それが恐らく死罪で終止符を打たれる拘留の前に一目金次に会いたかったためなのか、あるいは隙あらば彼を逃がそうと考えたのか詳しくは分からないが、いずれにしても彼女の目的は半七の言葉によって達せられないことが明らかになったのであり、同時に彼女が自宅へ立ち寄る

べき理由もここで失われた。しかし、そうであるにもかかわらず彼女は引き返さず、「金さんは居りませんか。それでもあたしは女のことでですから、少々支度をして参りとうございますから」と言つて自宅への道を歩き続けるのである。自身と恋人の決定的な破滅を悟つて涙を流した直後の小柳にとつて、「支度」がそれほどの重要事として認識されていたとは考えにくい。では彼女が金次のいない抜け殻にも等しい自宅へ、「支度」という口実をもうけてまで向かいたが、た理由は何だったのだろうか。

これについては両国の地理に注意することが有益である。小柳が出演し、また半七が彼女を連行すべく訪れた見世物小屋は隅田川の西岸である一方、小柳と金次の暮らしていた家があるのは向う両国で隅田川の東岸にあたる。つまり見世物小屋から小柳らの家へ向かうとすれば、必然的に両国橋を通つて隅田川を渡る事となるのである。そして彼女が既に自宅へ立ち寄る理由を喪失していることを考えると、彼女が本当に求めていたものは家での「支度」などではなく、その家への途上にある両国橋、すなわち最も手近な死に場所であつたらしいことが見えてくる。彼女は「少々支度を」と口にした時既に死を決していたのであり、その契機となつたのは、先述の金次の不在をめぐるやりとりの中で自身と恋人の破滅を悟つたことだつた。

こうして彼女は最期を迎えることになるが、その身投げの場面からは死に臨んだ彼女の内面を垣間見ることが出来る。両国橋の中ほどまで来た頃、小柳は「もしあたしに悪いことでもあるとしたら、

金さんはどうなるでしょうね」と半七に尋ねる。そして半七の「そりゃあ当人の云い取り次第さ」という返事を聞いた直後、彼女は「金さん、堪忍しておくれよ」と叫んで川に飛び込んでゐる。死を決意した彼女の胸に最期に浮かんだのは金次の身の上のことであり、最期の台詞は自分の巻添えになるように破滅した金次への詫言の言葉であつた。

このような結末の様子からうかがえるように、小柳は金次を深く愛していた。しかし一方で、先述のように彼女は経済観念に乏しく愛する者との生活を維持する力は備わつていなかったのである。それは金次も同じであつたことから、二人は必然的に生活苦に陥つたが、生活力に欠ける彼女は苦しみを酒で紛らわす他にまともな打開策を考え出せなかつた。そしていよいよ歳末が近づいて暮らしの破綻が目に見え出した時、お菊と清二郎の密会を目撃した彼女はついに悪計を抱くに至り、自分達が一線を越えてしまつてゐることを自覚しつつも、二人の生活のためにそれを即座に実行してしまつたのである。このように彼女を「よんどころなく」悪に向かわせたものは、愛する者との暮らしを立て直そうとするがむしやらなまでの強い思いであつた。

作中の小柳についての記述を元に彼女が自殺するまでの過程をこのように概括する時、状況や自身の性格といった条件の中で、避けられない破滅に突き進んでしまつた小柳の哀れな姿が浮かび上がってくる。そしてそんな彼女の姿は、彼女の想いをいとまたやすく裏切つてしまふ金次や、彼女をあくまで凶悪犯視して冷ややかに接す

ることで彼女の落ち込んだ破滅的な立場を浮き彫りにしている半七によって、悲哀の色が一層強められているのである。さらにもう一つ「梅雨小袖」との関連から見て注目すべきことと思われるのは、本作の悪役小柳に髪結新三とは大幅に異なる人物像が与えられていることで、中でも小柳が軽業師であることと女であることは特に目立った相違点であるが、小柳が軽業師であることで石燈籠を蹴って屋敷を脱出するなどの離れ業が可能になっているだけでなく、彼女を破滅へ導いたいい度胸・高い行動力・荒々しさなどといった性質がいきいきと描かれている。また小柳が女とされることで、凶悪犯の犯人としての意外性が持たされるとともに、恋愛感情に支配されやすいというイメージによって、本作の悲劇性の要である感情が強調されているようである。

こうした点を踏まえると、作者綺堂は一種の悪漢譚である「梅雨小袖」を下敷きにしつつ、それを巧みに改変することで、悪に手を染める人間の悲哀に目を向ける物語として本作を作り上げたということができるとはならないだろうか。

注

(1) 浅子逸男「音菊半七捕物帳 江戸の残党」、『日本文学』平成十七年十月)で指摘されているように、本作の事件発生年は初出では安政元年とされていたが、『半七捕物帳』(春陽堂、昭和四年一月)において天保十二年に変更され、またこれによって

吉五郎の死亡時期がコレラの流行時期から外れたために彼の死因もコレラから霍乱に変更された。他に目立った変更点としては、初出では「白木屋のお熊」書かれていた部分が「半七捕物帳」(旺文社文庫、昭和五十二年五月)から「白子屋のお熊」に変更されていることが『半七捕物帳事典』で指摘されている。

(2) 前掲「音菊半七捕物帳 江戸の残党」

(3) 河竹黙阿弥『黙阿弥全集』十一巻(春陽堂、大正十五年二月)

(4) 吉田弥生『梅雨小袖昔八文』と柳桜の人情噺』、『歌舞伎』三十号平成十四年十二月)

国立劇場調査養成部芸能調査室編『梅雨小袖昔八文』上演年表(『国立劇場上演資料集 382』平成九年三月)

「半鐘の怪」小考

加藤 文明子

「半鐘の怪」は『半七捕物帳』シリーズの中でも、半七が一度事件に関わってから即座に町を離れる形で物語の舞台から退場し、その間事件が進行したのちに、再び半七が登場し事件を解決する、といった構成に特徴のある作品である。大正六年六月号の『文芸倶楽部』に発表され、当初の題は「半鐘の音」であった。本稿では、この半七不在期間が作品内でどのような働きをしているかについて検証したい。

物語は、文久元年十月のはじめ、真夜中に煙も見えないのにたびたび鳴らされる半鐘の音によって幕を開ける。火の見梯子を見張る自身番の隙を突き、夜になるとじゃんじゃん鳴り出す半鐘。更に、雨の日の五ツ半頃路地で女が化け物に襲われるといった出来事から、「町内には化け物が出る」という噂も広まり、町の人々の神経は張りつめる。やがて、町の悪戯小僧権太郎が犯人と決めつけられ、事件は一時は解決したように思われたが、権太郎を監禁した夜中に又もや半鐘が鳴らされてしまう。町内総出で火の見梯子を警戒するも、警戒がゆるむとすぐに半鐘が鳴り出すという現象がひと月も続くこととなる。

十一月はじめの時雨がかった日に、岡っ引きの半七が自身番の家に招かれる。事件の調査をある程度するも、半七は別件により四、

五日ほど町を離れてしまう。するとその間に煙草屋のお咲や自身番の親方佐兵衛、番太郎の女房お倉が夜半に襲われたり、方々の家で食い物が盗まれるといった事件が相次いで起こる。

鞠祭りの日、半七は半鐘事件の調査を再開する。権太郎から、彼の兄が権太郎への仕打ちの仕返しのため、お咲、佐兵衛、お倉を襲ったことを白状させ、兄を堪忍するよう懇願されたのを受け、真犯人捕獲の協力を条件に半七は承諾する。予めあたりを付けていた路地の稲荷の社と空き家を調べ、こうして権太郎の協力のもと、半七は真犯人である猿の捕獲に成功する。

半七は最初に町を訪れた際に、火の見梯子に残された獣の爪蹟や、困い者の傘の上に飛び付いたり、物干しのあかい着物を攫っていく様子から、猿の仕業であろうと睨んでいた。事件後、権太郎は町内の人達に可愛がられ、一人前の職人となった。また真犯人であった猿は、両国の猿芝居の役者が逃げ出して町内にまぎれ込んだものであり、女形で八百屋お七を出し物にしていたことが後の調べで判明する。飼主は一貫文の科料、猿は世間をさわがした罪で八丈島へ遠島に処せられ、事件は一件落着となる。

半七の不在期間は何故必要だったのか

さて、前述の通り「半鐘の怪」には、半七が事件に関わってから、四、五日間町を別件で離れるという不自然なブランクが設けられている。この間半七が何をしていたかについて作中では殆ど語られず、ただ「まだ少しほかに仕かけている御用」、「ほかに手放すことのでき

ない用」と記されるのみである。人間か、妖怪かと騒がれていた犯人を、何故半七が稲荷の社付近に居着いた猿であると見定められたかについては、半七自身が最後に以下のように種明かしをしている。

それは半鐘をあらために登った時に、火の見梯子に獣の爪の跡がたくさん残っていたからです。どうも猫でもないらしい。こいつは猿公が悪戯をするんじゃないかと、ふいと思いついたんです。困い者の傘の上に飛び付いたり、物干のあかい着物を攫って行ったり、どうしても猿公の仕業らしゅうござんすからね。そこで、その猿公がどこに隠れているのか、わたくしは稲荷の社だろつと見当を付けたんですが、それはちつとはずれました。けれども多分最初のうちは社の奥にかくれていて、お供物なんぞを盗み食いしていたのが、だんだん増長しているいろの悪戯を始め出して、そのうちに困い者の家があいたもんだから、その空店の方へ巢替えをして、またまた悪さをしたんだろつと思えます。

つまり、四、五日町を離れる以前の初回訪問時に、自身番の家主から聞いた事情と火の見梯子の様子、そして路地の空き家と稲荷の社を確かめた時点で推理の材料は出揃っているのだ。にも関わらず、半七は町を離れた。そのせいで、彼のいない数日の間に権太郎の兄が犯罪に手を染めて、事態は悪化してしまう。この不在期間がどうして必要だったのかという疑問は当然抱かれる。

まず考えられるのは、権太郎の兄の犯行との関連である。仮に半七が最初に町を訪れた時に事件を解決してしまつたとしても、権太郎の兄の報復が事件解決後であつた場合、もしそのことが発覚すれば彼は罪人として裁かれてしまう。また、半七が最初に町を訪れるタイミングが十一月のはじめでなく、鞠祭りの日であつた場合、半七は権太郎の兄も裁く責任が生じる。十一月のはじめに依頼を受けた時点では、権太郎の兄は事件に関与していない。従つて権太郎の兄は、半七が依頼を受けた半鐘事件そのものの犯人ではないのだ。権太郎兄弟が同情に値するとはいへ、半七は独断で犯罪者を見逃している。そんな場面でも、回つ引きの倫理に反しているという印象を読者に全く与えないのには、受けた依頼の直接的な犯人ではないことが少なからず影響していよう。

さて、ここで犯人の正体である猿に注目してみよう。この猿は、両国の猿芝居の役者が逃げ出して町内にまぐれ込んだものであり、女形で「八百屋お七」を出し物にしていたことが後に発覚する。「八百屋お七」は天和年間に放火の罪で処刑された娘お七を劇化したもので、井原西鶴の『好色五人女』で取り上げられたのを皮切りに、浄瑠璃や歌舞伎などによつて様々に劇化され人気を博した。かの物語のあらましは、火災時に避難した旦那寺の寺小姓に恋慕し、火事になれば再開できると思ひ込んで再び自ら火事を起こす女の話である。火事という事件が起こっているからこそ、女は男と会える、という理屈であり、これはそのまま、権太郎の兄にも当てはまる。権太郎の兄は、半鐘事件が起こっている最中であつたからこそ、事

件の闇に紛れて犯行に及ぶことが出来たのである。半七が最初に町を訪れた時に、すぐさま猿を引つ捕らえて事件を解決してしまつたとすると、権太郎の兄は犯行そのものにも及ばなかつた可能性が高い。更には半七が権太郎に助力を仰ぎ、権太郎が町を救つた英雄として町内で見直されるという結末も訪れなかつたかもしれないのである。半七不在の四、五日間は、権太郎兄弟にとつては非常に意味を持つた空白期間であつたと言えよう。

半七の不在がもたらす江戸の闇

また一方で、この不在期間は別の捉え方も可能である。半鐘事件が最初に起こつた十月のはじめより一ヶ月は、事件を解決してくれるはずの半七は町を訪れない。

こんな不安な状態が小ひと月もつづいたので、人間の方も疲れて来た。もうこの上はどうしていいか判らなくなつた。

などであるように、既に人々は不気味な事件に疲弊しきつてゐる。それなのに、十一月になつてようやく半七が登場したと思いきや、町を一回りしたのち別件でまた数日町を離れてしまふ。その間に人間だか化物だかも解らない相手に町内の人々が次々襲われるのである。町の住人は勿論のこと、読者もまた、なかなか事件を解決してもらえないことに対する不安感と焦燥感を感じよう。町中に漂う不安感は半七に、「気のせいかな、陰気な町だな」と言わしめるほど

である。そもそも権太郎の兄が仕返しをしようと思つた最終的な引き金は、自身番達が権太郎を縄で縛つたことで、

自信番の奴らがむやみに棒で撲つたり、縛つたりしやあがつた。ひとを縛るといふことは重いことで、無暗に出来るもんじゃやねえと兄貴が云つた

と権太郎が述べるように、十四歳の子供のいたすらに対して、町の人々がかなり過剰に反応している様子が見て取れる。それだけ町内が騒然とし、事件を一刻も早く収束させようと躍起になつていたのである。

ここで「ミステリーと妖怪譚」の關係を取り上げたい。半鐘事件の犯行シーンは、「眼に見えない手がどこからかぬ、つと現われて」「着物が自然にあるき出した」「あたかも白い砂が渦をまいてお味の足もとから胸のあたりまで舞いあがつて来た」というように、ことさら妖怪を思わせるような表現で描写されている。犯人が妖怪かもしれないといふ事件の描き方は、「半鐘の怪」に関わらず、『半七捕物帳』の他の話にも数多く見ることが出来る。このシリーズが探偵物であると同時に、江戸らしさを伝えるというテーマを一貫して持っているのは周知の事実であるが、その江戸らしさの中でも大きな位置を占めているのが「夜の恐怖」ではないだろうか。

北風が軽い砂を転がして吹いてゆくのが夜目にも白く見えた。

風もない、月もない、霜の声でもきこえてきそつな静かな夜であつた。町内にももつ灯のかけは疎らであつた。

冬の夜の闇が漆のように横たわつていた

などとあるように、江戸の夜は暗く、心細く、不気味である。明治以降もたらされた街灯やランプといった、暗闇をはつきりと照らす光が存在しない世界である。事件の起こる時間帯も全て夜の闇の中であり、人々は「夜はもう外へ出るんじやないよ」と言い合い、女子供は閉じこもる。人々は作中でも非常に夜を恐れている。次の一文は、半鐘事件の冒頭の描写である。

うす暗い焼芋屋の店さきに、八里半と筆太にかいた行燈の灯がぼんやりと点されるようになると、湯屋の白い煙りが今更のよつに眼について、火事早い江戸に住む人々の魂をおびえさせる。秋の風が秩父の方からだんだんに吹きおろして来た。

ぼんやりと頼りない行燈や家々の灯りではない、江戸の夜をはつきりと照らす光とは何か。それは火事の炎である。江戸における夜を照らす強い光は、「人々の魂をおびえさせる」禍々しい光なのである。作中で火事は起きていないが、度々囁かされる半鐘は火事を連想させ、人々の恐怖を殊更煽っている。江戸の夜においては、光すら恐怖の対象なのである。だからこそ、夜の闇に紛れて起こつた得体の知れぬ事件は怪異と捉えられ、「犯人は妖怪かもしれない」とい

う考えが江戸の住人にとつてごくごく自然な説となるのだ。

権太郎の兄が番太郎の妻お倉を襲つた半時ほどの後、印判屋の女房が自宅の屋根の上で二つの大きい光つた眼を見る。すると町の人々は、「番太郎の女房の云うことはあてにならない」として、実際に相対して相手を「人間だ」と判断したお倉よりも、引き戸越しに覗いて「化け物だ」と判断した印判屋の女房の説に賛同してしまう。現代人の感覚では考えがたい、妖怪説を有力とする傾向は何に基づいているのだろうか。一つには、番太郎の女房本人の信用問題もあるかもしれない。しかし、こうした怪事件がすべて化け物のせいということになれば、もはや人間の手には負えない。そうなればあの恐ろしい江戸の夜に警備のために一般庶民が外へ出るなどもつてのほかで、戸を閉めて家に籠もり朝が来るのを待つより他ないのだ。

半七は最初に町を訪れた際、自身番の家主から事情を聞いた後、事件現場を見に行く。「火のを見を仰いでちよつと考えていた」「すぐにするすると梯子を伝つてのぼつた」「半鐘をあらためて又すぐに降りて来て」と、あるように、火の見梯子に注目している。この時に半七は猿の痕跡を見つけたわけだが、「火の見梯子に猫以外の獣の爪痕がある、これは猿公の仕業じゃないだろうか」といった具合に、読者にその物的証拠を知らせる書き方をしていない。読者は半七の目線で読むこと、つまり探偵の立場に立つて推理することを許されてはいないのである。

『半七捕物帳』における江戸時代の半七の活躍は、明治時代老人となつた半七によつて「わたし」に語られる。従つて読者の視点は

「わたし」と同等になる。読者は「わたし」と一体となり、いきいきとした老人の語りによって江戸の町を体験するのだ。さて、「半鐘の怪」には二カ所、地の文でなく、時間軸が一旦明治に戻り、老人の半七の台詞によって語句の説明が協調的になされる箇所がある。それは「自身番」と「番太郎」という、江戸にかつてあって明治で消滅したものである。「お若い方は御存じありますまいね」との口ぶりからも、「わたし」にかつての江戸を知って欲しいという老人の意志が感ぜられる。これが読者に対する岡本綺堂の意志なのか、「わたし」に対する半七老人の意志なのか定かではないが、物語の語り手は聞き手に対し、不安を抱いた町の人々の立場で物語を享受させんとしているのだ。ここで半七の不在期間が生きてくる。我々は今まで別の話で幾多の事件を半七が解決していったのを見てきただけに、半七がいらないという状況が実に心細く感じられる。彼がいらない以上、我々は町の人々と同様に真相もわからぬまま、事態が悪化していくのをただただ眺めるよりほかない。先に述べた、得体の知れない事件を化け物の仕業と括ってしまいたくなる江戸の人々の心理にも少なからず共感できるところがあるように思えてくる。半七が一時舞台から消えることで、我々の心理はまさに語り手の思惑通りに操作されるのである。

「半鐘の怪」における半七不在の空白期間。これは「八百屋お七」に通ずる権太郎の兄の犯行を促すものであると同時に、読者を江戸時代の人間と同調させ、彼らの感ずる「夜の恐怖」を喚起させる働きも有しているのではないだろうか。

参考文献

『日本古典文学大系 四十七 西鶴集』岩波書店、昭和三十一年十一月

大久保治男『江戸の刑法』高文堂出版社、昭和五十三年四月

「帯取りの池」小考

金子莉 給

本作は大正七年、『文芸倶楽部』一月号に発表された。題名にもなっている帯取りの池については様々な言い伝えが存在し、半七老人がその伝説について語るところから物語は展開していく。しかし、その「忍な」伝説が語られながらも、「帯取りの池」の読後感はどこかしら温かみがあるように思われる。それは、半七の人柄が大きく関わっているからである。本稿では、帯取りの池の伝説を本作に取り上げた所以と半七の人物像について具体的な言動や表情に着目し、論じたい。

帯取りの池の伝説

まず、事件の概要は以下の通りである。

安政六年三月、奇妙な伝説を持つ帯取りの池に帯が浮かんでいた。この池には、池のぬしが美しい帯に化け、近付いてくる者を池底に引き込むという説、もつ一つは盗賊が帯を忍ばせ、それを取ろうとした者を池に引き摺り込み、金品などを奪うという説が言い伝えられている。しかし、発見された帯は池のぬしでも盗賊の仕業によるものでもなく、何者かに殺された、おみよという美しい娘の物であることが分かった。そして、半七が手先の松吉と共に事件を追っていくと、おみよは殺されたのではなく、恋仲にあった千次郎と心中

するつもりで自殺したことが判明する。千次郎はおみよの死体を発見すると、半分夢中で帯を持ち出して死に場所を探すが見つからず、帯取りの池に帯を投げ捨てた。その後、おみよの他に関係のあった杵屋の師匠、お登久に嘘の理由をつけ匿ってもらっていたが、最後は半七に捕えられることとなる。

本作の事件は帯取りの池の伝説を絡めることで、その不気味さを増している。『半七捕物帳事典』によれば、帯取りの池の伝説は、京都の帯取池、和歌山の尚蓮池に実際に伝承があるという。前者については本作の冒頭でも言及されるが、江戸に帯取りの池が存在したという資料は見あたらず、同事典は『桜姫全伝曙草紙』の「蝦蟇丸伝帯取池記」などによる触発かと推定している。

では、『桜姫全伝曙草紙』とはどのような作品か。鷲尾義治の正妻・野分は、義治の妾・玉琴の妊娠を知ると、子ができない嫉妬心から玉琴を殺させる。玉琴は怨霊となって、後に生まれる野分の娘・桜姫の身に怪奇を及ぼすという読本であるが、その中で巻之三「蝦蟇丸伝帯取池記」には、本作と同じ帯取りの池の伝説が描かれている。鷲尾家が滅亡したため敵兵から逃れてきた野分は、池の水面に浮かぶ美しい帯を見つける。そしてその帯を取ろうとしたところを、池底に潜んでいた盗賊・蝦蟇丸に引き摺り込まれてしまう。この言い伝えが、帯が池のぬしに化けるといふ伝説となって後世にまで口承された、という内容である。この蝦蟇丸が、「帯取りの池」で言われる「水練に達した盗賊」に当たるであろうことは容易に考えられ、話の筋からも本作で語られる帯取りの池の伝説が、「蝦蟇丸伝

「帯取り」の要素に多分に基因していることは明瞭である。

では、なぜこの伝説が「帯取りの池」の下敷きとなったのか。そこには「嫉妬」という一つのポイントがある。野分は嫉妬によって玉琴を殺め、そのために最期は雷死する。この伝説のように、感情に左右される女の姿を、綺堂は半七を通して揶揄しているのである。

それは、お登久に対する半七の様子から窺える。千次郎との関係を問う場面では「にやにや笑いながら」とあり、二人の関係を察知した上でお登久に吐露させようとする半七は女を見透かしている。ここでは、隠しきれないお登久の焦りや戸惑いの感情が千次郎との関係を容易く見抜かせたことを、「にやにや」という半七の笑い方によって表しているのである。そして女の嫉妬心を利用して、事件を解決へと導いていく。半七は千次郎がお登久の家を隠れていることを了解した上で、千次郎の居何処をお登久に問い質すのではなく、まずおみよとの関係を打ち明ける。それを聞いたお登久は、「くやし涙の眼を腫らせて」、匿っていた千次郎を自らの手で引っ張り出すのである。

さらに、本作には女の嫉妬を利用するだけではなく、その女を「ははははは」と笑い飛ばす半七の姿が一箇所見られる。一つ目は安政六年当時、千次郎との関係を隠そうとしたお登久への笑いである。

「おめえもすいぶん罪が深げえ。おぼえているが好い。はははははははは」

「半七は笑った」という表現ではなく、「ははははは」と笑う半七は、一人の男によって揺れるお登久の感情的な部分を刺激しているかのようである。もう一つは、半七老人が「わたし」にお登久と千次郎のその後の様子を語っている場面である。

「男が無事に済んだから好いようなものの、一旦こつちへ引き渡した以上、もし重い科人になったらもう取り返しは付きませんや。それを云ってわたくしがお登久をからかいますと、お登久はまじめな顔をして、女っていうものは皆んなそんなもんですって……。ははははははは」

「女っていうものは皆んなそんなもんです」と話すお登久の言葉は、女とは嫉妬する生き物なのだということを暗に示している。「はははははは」という半七老人の笑いは、そういった、女という生き物に対する綺堂の冷かしなのである。

「帯取りの池」における半七の人物考

綺堂は言葉ではなく、半七に笑わせることによって嫉妬する女への揶揄を表した。しかし、その嫉妬心からかうためだけに半七は笑ったのではない。

「にやにや」という半七の笑い方によって、お登久は千次郎との関係を見抜かれていることを悟る。そこから千次郎にまとわりつく女の影を半七に話し出していく。そして、失踪している男が自分と

關係を持つていること、他の女の存在を訝つてゐること、それらを同時に知つた半七は、「不安の暗い影」を浮かべるお登久にとつて一番の理解者となつたのである。だからこそ最後に、お登久は匿つていた千次郎を半七の前に突き出したのだ。半七は「笑い方」一つでお登久の心を氷解し、不安を打ち明けさせる環境を作り出したのである。

ここまでは半七の笑いに注目してきた。その笑いには冷かしと理解が内在している。では、半七の言行から窺えるキヤラクターとはどのようなものか。お登久や松吉に対する半七に着目すると、配慮や優しさが見えてくる。まず、お登久への発言を挙げる。

「師匠の前じゃあちつと云いにくいことだが、千次郎は市ヶ谷合羽坂下の酒屋にゐるおみよという若い女と、近所の質屋に奉公している時分から引つからんでいたんだ。」

「師匠にやあ気の毒だが、煎じつめると、まあそんな理窟になるようだね。」

千次郎とおみよとの關係を打ち明ける半七は、「師匠の前じゃあちつと云いにくいことだが」「師匠にやあ気の毒だが」と、お登久にとつて辛い事實を語る際に、このような前置きを述べてゐる。これは半七の弱者に対する配慮なのではないだろうか。お登久に突き出された千次郎に、

「おい、千次郎。正直に何もかも云つてしまえ。自身番まで引き摺つて行つて、わざわざ引つぱたくのも怠だから、ここでみんな聞いてやろつぜ。」

と促す場面でも、せめてお登久の前で全てを打ち明けさせようとする半七ならではの優しさを読者は感じるのである。

次に、若い子分、松吉に対する半七の温かさが窺える言動に着眼したい。

「ひよる松、まあ手前にしちやあ上出来のほうだ。おとなしそつに見えていても、旦那取りをするような女じゃあ、ほかにも又いろいろの紛糾があるだろう。そこで、お前はどつする」

「それだけのことが判つていりやあ申し分ねえじゃあねえか」と、半七は叱るよつに云つた。

前者はおみよの死体が発見されてから七日後、おみよが旦那取りをしていたという情報を伝える松吉に、半七が放つた言葉である。半七は松吉の收穫を「上出来のほうだ」と褒めながら、「ここでお前はどつする」と、全てを指示するのではなく、松吉にこれからの動向を考えさせる発言をする。ここに、手先の松吉を育ててゐるような半七の側面が窺える。後者は千次郎が昔む古着屋とお登久の家の見張りをしていた松吉が、五日間見張りをした結果、千次郎が現れる様子はないと半七に報告する場面である。お登久はその間何を口

にしたのかと聞かれ、泥鰌鍋や刺身をやらせていたと伝える。ここで、お登久がそれだけの物を取っていれば、千次郎に食べさせるためにご馳走を拵えているのだという推測がつくだろうと、松吉に「叱るように云った」とある所に注目したい。「叱った」ではなく、「叱るように云った」という表現は、指摘をしつつも柔らかな印象を受け、半七の親心のようなものを感じる。その他にも、下戸の半七が松吉の酒に付き合う件からは、仕事とは関係のない所でも若い者との距離感を大切にしていることが分かる。

こついった半七の言行を見てみると、一歩離れたところから手先の行動を見つめ、温かな心をもって若い者を育てているという半七の一面が見えるのである。

では、お登久や松吉に対する半七の特性は全くのオリジナルなものなのだろうか。実際に存在する人物を手本とし、半七を描いているのかという疑問について、綺堂は「半七老人は実存の人がそれについて屢々問ひあはせを受けます。勿論、多少のモデルが無いでもありませんが、大体に於て架空の人物であると御承知ください。」と語っている。ここで、半七について大凡、「架空の人物」であると言つ一方、「多少のモデルが無いでもありません」とも述べていることに注目したい。綺堂は自身が影響を受けた人物の一人について、次のように語っている。

剛坂金蔵、名前からして何だか物々しくきこえるが、忠実で善良で非常にやかましい老人で、少しでも気に食はないことがあ

ると、誰彼の容赦無しに睨み付ける。時によると、主人でも叱りつけるといふ勢ひであるから、この金蔵老人に睨睨されると、大抵の者は縮み上つてしまふのである。(略)しかし一面には非常に親切で、若い者にもよく気をつけてくれるので、私たちにとつては怖いやうな懐しいやうな老人であった。

「一面には非常に親切で、若い者にもよく気をつけてくれるので」という人柄は、お登久や松吉に対する半七の人柄と重なる。浅子逸男も、「ここで言う「怖いやうな懐しいやうな老人」の語り口が半七に生かされていることは想像に難くない。」と論じている。

笑いや言動に目を向けてみると、巧みに事件を解決していく阿つ引としての半七だけではなく、その人柄の断片が窺えるのである。

京伝の読本に描かれた帯取りの池の伝説には、一人の男を巡って生まれた女の嫉妬によつて自身を滅ぼしていく様子が描出されている。綺堂が『桜姫全伝囃草紙』を下敷きに「帯取りの池」を書いた背景には、女の「嫉妬」という感情をからかっている側面があるように思われる。本作には、千次郎という一人の男が二人の女と関係を持つという伝説との共通項はあるものの、嫉妬という言葉自体は出てこない。しかし、千次郎とおみよとの関係を知つたお登久の様子は「嫉妬」そのものである。半七はお登久の嫉妬心を巧みに利用して真実を導き出す。その姿を、綺堂は半七を通して「はははははは」と笑い飛ばすのである。

しかし、「帯取りの池」には半七の若者や弱者への配慮、優しさが随所に見られるために、嫉妬に揺れる女を冷かす半七が前面に表れることはなく、本作の読後感には温かい。親心をもって松吉を育てている半七の目からは、事件の解決過程を示唆しつつ優しく見守っている様子が見て取れる。松吉のことを「ひよろ松」「松」と愛称で呼ぶ所にも、その一端が窺える。また、妬心に左右される女を刺激しながらも、憂色を見せるお登久の不安を、半七は「にやにや」笑いながら汲んでいく。さらには、千次郎とおみよとの関係によって傷つくであろうお登久の方向に配慮した言葉も口に出している。嫉妬に狂う女を揶揄する中にも、お登久の心情を思いやる描写が見られるのである。それ故に、温度を感じる読後感に包まれるのだ。

注

- (1) 岡本綺堂「半七捕物帳の思い出」千葉俊二・編『岡本綺堂隨筆集』(岩波文庫、平成十九年十月)。初出は『文芸倶楽部』(昭和二年八月)。
- (2) 岡本綺堂「明治劇談 ランプの下にて」(岩波文庫、平成五年九月)。初出は『新演芸』(大正九年八月)。
- (3) 浅子逸男「半七捕物帳の形成 松茸ノート」『花園大学文学部研究紀要』第三十二号、平成十二年三月)

参考文献

- 『山東京伝全集 第十六巻』ペリかん社、平成九年四月
佐藤至子『山東京伝 滑稽洒落第一の作者』ミネルヴァ書房、平成二十一年四月

「春の雪解」小考

古屋 麻衣

「春の雪解」は、大正七年二月号の『文芸倶楽部』に発表された、半七が係わる六十番目の事件である。

梗概を手短に紹介すると、ある雪の日、用達に出た半七は辰伊勢の寮で仲働きをしているお時と按摩徳寿の悶着場面に遭遇する。当初は気に留めなかった半七も再び同じ場面に遭遇すると疑問が生じ、徳寿から寮は気味が悪いと訴えられたことをきっかけに捜査を開始する。結果、寮の若旦那栄太郎は花魁誰袖と辻占売りおきん、この双方と関係を持っていたことが明らかになる。誰袖がおきんを殺めたため栄太郎は真相を握るお時とおきんの兄寅松に口止めの百料を支払うが、二人からの相繼ぐ脅迫に悩まされる。そして半七がお時と寅松を捕えたとき、誰袖と栄太郎は心中を遂げてしまふ。

さて、半七を事件に導いた徳寿はいえ、あくまでも誰袖と栄太郎の文使いを担うだけの人物であり、裏に潜む複雑な事情を一切知らなかったというのである。この奇妙な出来事を始めとして、本作は怪談の要素が随所に散りばめられている。

本稿では、まず典拠となっている「河内山の狂言」が作品にどのような影響を及ぼしているか考察し、そのうえで雪の描写と半七の視点に焦点をあてながら、本作における怪談の要素について論じていきたい。

「河内山の狂言」から見える「おきんの霊」

「河内山の狂言」とは、河竹黙阿弥が五代目尾上菊五郎のために書いた「天衣紛上野初花」のことである。

舞台は、札付きの悪である河内山宗俊が江戸の質屋で口約束を交わして百両を手に入れるところから始まる。河内山の弟分で直待と呼ばれる片岡直次郎は吉原大口屋の花魁三千歳と深い仲であり、三千歳は直次郎に百両を賣いだことから貸主に返済を求められるが、直次郎が河内山から借りた百両を差し出したため事なきを得る。その後、数々の悪事によりお尋ね者となった直次郎は顔見知りの按摩文賀から三千歳が病を患っていると聞き、雪の畦道を忍んで違ひに行く。直次郎は三千歳に殺してほしいと頼まれるが、捕手に入り込まれたため現世での別れを告げて雪の中を去って行く。なお、題名の由来となっている「忍逢春雪解」は三千歳と直次郎が逢引をする場面で唄われる。

さて、「春の雪解」の冒頭では半七老人が「河内山の狂言」との類似性を述べるため、「わたし」及び読み手は「河内山の狂言」を意識しながら事件の進行を追うことになる。たしかに両者は、百両の金、花魁の恋、恋人の仲介役を担う按摩など、多くの共通点が見受けられる。しかし、結尾で「わたし」が「事実にはかの直待と三千歳との単純な情話よりも、もっと深い恐ろしいもののように思われてならない。」と述べることからわかるように、その印象は大きく異なるものとなっている。では、「こいでいっ」もっとと深い恐ろしいものとは何だろうか。

まず、引用部にもある通り、本作の男女関係が「単純な情話」だといえないことが挙げられる。「河内山の狂言」で優くも美しい悲恋を繰り広げた男女にあたる二人は、本作で嫉妬心から生じた殺人や追い詰められた拳句の心中という悲惨な結末に至ってしまう。予備知識があるからこそ読み手は事件の悲劇性を強く感じ、さらに作中では触れられていないおきんの無念や怨念を掘り取るようになる。それはおきんが霊となり徳寿や半七に事件の解明を訴えるという、本作における怪談の要素と結びつくものである。

また、本作の怪談らしさを引き立てる役割として、次に述べる雪の描写が特徴的であることも見逃せない。

雪の描写

本作の季節は春の気配を間近に控えた冬である。これは同じく季節を冬とする「河内山の狂言」と内容を被せたことによると考えられるが、作中で「河内山の狂言」には見られない怪談らしさを演出するにあたり、冬の象徴である雪が巧みに使用されている。雪は不気味さを表す「黒」「影」などの語と共に、雪の持つ様々な性質のうち霊を連想させる「白」の部分を取り立てながら幾度も登場し、まるで霊が雪となり事件の解決を訴えているかのように描かれている。では、物語の流れに沿って雪の描写を見ていこう。

【導入】徳寿とお時の悶着場面に遭遇する

「今にも白い物がこぼれ落ちそうな暗い寒い影」は事件が始まる予兆。

「白い物」で霊の存在、「影」で不気味さを表す。「鶴の羽をむしったような白い影」は再び「白い影」だが、縁起物とされている「鶴」の「羽をむしったような」で不吉さを表している。

【発端】事件の臭いを嗅ぎつける

事件に気づかなかつたため「家へ帰りつく頃には歌んでしまった」が、再び事件と触れ合うため「大きい雪」が降り出した。「入谷の田圃はもう真っ白に埋められていた」「は、もつ」で進行の早さ、「真っ白」で再び霊の存在、「埋められていた」(受け身)で既に事件は進行してしまつたため受け入れられないということを表している。

【展開】徳寿に踏み込んだ話を持ちかける

「按摩の傘の白い影」でまたしても「白い影」。按摩に霊が取り憑いているとも受け取れる。「花びらのような大きい雪が重そうにぱたぱた落ちていた」の「花びら」は女性、すなわちおきんの霊。軽やかなはずの「花びら」が「重そうにぱたぱた」は不気味さや必死さの表れか。

【展開】徳寿から話を聞き終える

「降りやまず白い花びらが暖簾をくぐって薄暗い土間へときどき舞い込んで来る」は「土間」を半七の領域、「白い花びら」をおきんの霊だとすると、半七が事件に介入した(事件のほうから半七に近づいてきた)ことを表している。「舞い込む」は霊の喜びか。

【展開】 庄太と共に手掛かりを求めて動き出す

雪は降らずのどかな日、「上野の森の上には薄紅い霞が流れている」「二人はあたたかい日を背負う」と作中で唯一の好天。一旦安心させることで後に起こる悪天(雪)を印象づけている。

【展開】 庄太の音沙汰がなくなり捜査が進まなくなる

「春が来たものと欺されているとそれから四、五日たつて夕方から急に寒くなって来た」は想定外に捜査が難航する様子。その後「夜中から降り出して朝は真っ白」「四ツ(午前十時)頃には屋根から融けて落ちる音が忙しそうにきこえた」「雪解け路」と変化が著しくなることで、事件の急展開を表している。また、「発端」と同様に「真っ白」で雪の存在を匂わせながら、題名「雪解け」の出現で物語が「見せ場」へ入り事件が解決することを示唆している。

【展開】 「見せ場」行き詰まりかけたが諦めずに手掛かりを追う

「雪あがりの底冷えのする日」とあり、事件が解決へ向かっているからか、これ以降雪は降らない。また、引き続き題名の「雪解け路」が出現する。これは初出時との異同があり、初出では「雪融け路」となっていた。【展開】のほうは初出も「雪解け道」である。あるいは、事件が「解」決に向かったため「見せ場」では疑念や雪(雪)が「融」けていく、というような意図があったか。

【展開】 「見せ場」お時と寅松の密談を聞き二人を捕える

「一本路をならんでゆく二人のうしろの影が消え残っている雪明かりに薄黒く見えた」の「雪明かり」は雪による訴えか。「大根卸しのように泥濁っている雪解け路」でさらに引き続き題名「雪解け路」が出現する(初出時は【展開】と同じく「雪融け路」)。また、今までに例えられていた「白い物」「花びら」と異なり「大根卸し」は見せ場ならではのインパクトのある表現である。「雪解け路」の出現が三度目であり「泥濁っている」ともあることから、泥のついた雪解け路を連想しがちだが、「大根卸し」とすることでやはり白を連想させている。その後、お時と寅松を捕える場面では「泥まぶれになって這い起きたお時」とあり、「雪解け路」から白さが消えている。これは事件が解決して雪の力が消えたことによるものか。

以上の通り、雪は物語の進行に連動しながら、事件に生々しい怪談らしさを吹き込んでいることが見て取れる。

ただし、雪はそれと同時に、半七の捜査と連動していることにも注目しておく。主軸を半七の捜査に置くと、半七が雪に促されて捜査しているのではなく、半七の捜査が雪に反映しているという解釈もできるのだ。

では、半七はどのような視点で事件と向き合っているのだろうか。

半七の視点

当初、徳寿とお時の悶着場面に遭遇しても気に留めなかった半七が再び同じ場面に遭遇して真相を追求することになったきっかけは、

二度目に竜泉寺前を訪れたとき寮の前で突然日和下駄の前鼻緒が切れたこと、手が龜縮んで鼻緒を立てるのに暇がかかったこと、徳寿が辰伊勢の寮を気味が悪いと訴えたことの三点が挙げられる。これらはいずれも、霊の仕業としてもそれ以外の要因としても受け取れるが、霊の有無を問わず雪の降る状況下であれば起こり得る前者二つに対して、三つ目はどうだろうか。

この件に関して、横山泰子は『綺堂は語る、半七が走る 異界都市江戸東京』にて、次のように述べている。注は稿者による。

この話も犯罪は解決するが、徳寿の経験した「ぞつとして我慢ができない感じ」の謎は解明されない。(略)半七は世の不思議を否定してはいないのである。円了の妖怪分類にあてはめて考えても、このケースは「偽怪」でもなし、「誤怪」でもない。半七の推理力、操作能力が犯罪を解決しているのだが、この事件の特殊性は徳寿のとき超能力者があって初めて事件が明るみに出るという点だ。徳寿は今でいうところの霊能力者にあたる。

たしかに、右記のような視点で本作を読むことは可能である。しかし、果たして半七自身も徳寿のことを「超能力者」や「霊能力者」と見なしていたのだろうか。

作中では徳寿の話聞き終えた半七について次のように描写されている。

「なんだか理窟があるような、理窟がないような。一種奇怪な物語を。この盲人から聞かされて、半七も黙ってかんがえていた。」もとより盲の云うことで、別に取り留めた証拠もないのであるが、半七はそれを「一種の不思議な話」として、ただ聞き流してしまっわけには行かなかった。彼はあくまでその不思議の正体を突き止めたかった。」

aは「奇怪な物語」「不思議な話」と言い切らず、他の可能性すなわち奇怪とも不思議とも言えぬ科学的な見地を示唆するように「一種」という言葉を付け加えている。bは「按摩」や「徳寿」と書かず身体的に不利な部分を取り立てることで話の信憑性を疑う姿勢が表れている。従ってcとあるように、「奇怪な物語」「不思議な話」なら「ただ聞き流してしまっ」はずだったが、そうではなく、徳寿による訴えの「正体を突き止め」よつとしたのである。

徳寿の訴えが何であったかは最後までわからない。しかし、誰袖やお時と接することで屋敷内の張り詰めた人間関係を敏感に察知し、それが怪談を信じる徳寿には霊の存在として認知されたのかもしれない、少なくとも半七はそのように判断したからこそ事件に介入したのではなからうか。

最後に、本作の結尾で交わされる会話について考えてみたい。徳寿の訴えは何であったかと問い掛ける「わたし」に対して半七老人は明確に答えず、「さあ、それは判りませぬね。そういうむずかしい理窟はあなたの方のほうがよく存じでしょう。」と口にする。これは

「あなた方」と称される「わたし」が数学や物理学などの科学的な近代教育を学ぶ立場であることから、「そういうむずかしい理窟」で非科学的な現象の解明を示しているのである。

だが、半七老人は「わたし」に対して、あたかも怪談であるかのような演出を施している。徳寿の訴えと関連づけるように「辰伊勢の寮の床下にはおきんの死骸が埋まっていたんです。」と打ち明ける語り方には、裏のありそうな話を落としてから幕を閉じるといって、怪談にありがちな構造が成されているのだ。そこには、怪談を好みながら怪談に怯える「わたし」の様子を微笑ましく見守るよつな、半七老人のユーモラスな一面が滲み出ているのかもしれない。

本作における怪談

『半七捕物帳』には怪談の要素を持つ作品が多数ある。そのなかで、明らかに人為的な背景を持つものと得体の知れぬ何か潜むように思えるものの二通りがあるとすれば、本作は後者に該当する。河内山の狂言、雪の描写、徳寿の訴え、そして半七老人の語り方により、読み手は奇妙な感覚を携えながら物語の終幕を迎えることになる。

しかし、だからといって本作を怪談だと認識してしまうことは、いわずもがな早計である。蓋を開ければ、怪談に惑わされず鋭い勘や粘り強さによって事件を解決していく半七を中心に、怪談を活かそうとして出来あがった綺堂の探偵小説がそこにあるのである。

注

(1) 浅子逸男「半七捕物帳の形成 松茸ノート」によると、半七のモデルについて綺堂自身は人物を特定していないが、半七と五代目尾上菊五郎は合わせたように年齢や表情の描写が似通っているとのことである。

(2) 通称「河内山と直侍」。別題「三幅対上野風景」。雪夕暮入谷峠道」など。初演は明治七年十月十一日の河原崎座。雲上野三衣策前。だが、このときは河内山のくだりを中心としていた。直侍のくだりは明治十四年三月三十一日の新富座。天衣紛上野初花」で初演され、この時に河内山のくだりも大幅に増補改訂された。以後、これが決定版となる。なお、直侍の役は明治七年時に関三十郎が演じ、明治十四年時に五代目尾上菊五郎が演じた。

(3) 他と比べて半七の心情がかなり細かく描写されている部分「徳寿を帰してやって、半七はしばらく考えた。・・・」から、今まで噂にしか出ていなかった主要人物たちと立て続けに出会いながら急展開で解決に向かう部分「・・・二人ともに剃刀で喉を突いていたのであった。」までを「見せ場」とした。

(4) 井上円了は妖怪の種類を次のようにまとめている。



「朝顔屋敷」小考

蔡 維 綱

参考文献

浅子逸男『半七捕物帳の形成 松茸ノート』、花園大学文学部紀要』

(三十二) 平成十二年三月

横山泰子『綺堂は語る、半七が走る 異界都市江戸東京』、教育出版、

平成十四年十二月

国立劇場調査養成部資料課編『通し狂言天衣紛上野初花 河内山と

直侍』、日本芸術文化振興会、平成十五年十一月

古井戸秀夫・今井謙太郎『天衣紛上野初花』、白水社、平成九年八月

東洋大学井上円了記念学術センター『井上円了・妖怪学全集』(六)

柏書房、平成十三年六月

江戸時代、朝顔は武士から庶民まで愛される植物であったが、一方ではひどく朝顔を忌み嫌う人間もあり、更に朝顔に纏わる怪談も多く見られる。岡本綺堂は『風俗江戸物語』の「江戸の化物」の段において、江戸時代には一町内に一軒くらいずつ、幽霊やお化けに纏わる屋敷があり、江戸全体で見れば数えきれないほど存在していたと記している。例えば、牛込の中山という旗本の屋敷は当時、「朝顔屋敷」と言い、朝顔の花、朝顔の模様、または朝顔に似たものでも、決して屋敷の中へは入れなかったということである。屋敷の中に朝顔の花が咲くと、きつと何か凶事や不祥のことが続いたというのである。この江戸で噂されていた話をモチーフに、半七の係わる二十四番目の「朝顔屋敷」(『文芸倶楽部』大正七年三月)は描かれている。

安政三年の冬十一月十六日、半七は朝から八丁堀の旦那の呼び出しを受けた。番町に住む旗本杉野家の子息で、組中評判の美少年の大三郎がお茶の水の湯島聖堂で素読吟味を受けるため、二人の供であった中小姓の山崎と中間の又蔵を連れて朝早く屋敷を出たが、水道橋の近くで姿を消してしまったという神隠し事件である。

この物語のテーマは表題に示された通り、朝顔と旗本屋敷とが緊密に結び付いている。しかし、朝顔と旗本屋敷の関係を考える前に、

稿者がまず気になるのは、「神隠し」という迷信の存在である。そこで、本稿は「神隠しと江戸社会」及び「旗本屋敷と朝顔の特性」について考えていくことにしたいと思う。

神隠しと江戸社会

子供などが急に行方知れずになることは古来、天狗や山の神の仕業とされ、「神隠し」は江戸時代には一般に信じられていた。ところが、「朝顔屋敷」では、大三郎が神隠しに遭うと、主人の大之進は妄りにこんなことを世間に発表してはならぬと、家中の者どもの口を封じさせる。杉野家の対応は当時の社会の雰囲気と比べて、過敏すぎるのではないだろうか。それにもかかわらず、家中の人々がそれを平然と受け入れているのも奇妙といえは奇妙なことだ。その原因は恐らく、江戸時代から「儒学」が社会一般、特に武家に及んでいたことに関係するだろう。そこで、本文中にも記される「素読吟味」と「学問吟味」から考えてみよう。

「素読」のテキストは主に四書五経であった。これらは儒学の基本となる漢文の書物で、江戸時代の修身教育の教科書でもあった。「学問吟味」とは筆記試験のことである。試験では四書五経などの一節が出題され、章意、字訓、解義、余論などを答えるというテスト形式であった。三年に一度行われる「学問吟味」が上級者の試験だとすると、「素読吟味」は初級者の学力試験だと言える。「素読吟味」に合格しないと「学問吟味」を受ける資格がなく、更には三年続けて落第するともはや受験資格がなくなり、家督相続すらできないと

いう。そのため、武家にとつてはその落第した者が嫡子ならば大問題であり、結果子供より親のほうが夢中になっていったという。そこで、ひと粒種の嫡子である大三郎は冬の夜がまだ明けないうちに起き、寒い風霜を冒し、狐の暗く啼く声を聞こえながら、試験に赴くわけである。儒学教育をいかに重視していたのが「学問吟味」と「素読吟味」からしのばれよう。江戸時代の儒学は立身出世の基準だと言つても誇張ではないだろう。

「子不語怪力乱神」。『論語』の述而篇に見える一文である。江戸社会を創り上げた武家の心の中には、非合理を排するこんな思想が根強く存在していたのであり、四書五経を無点本で試験を受けるほどの大三郎ならば熟読した文章に違いない。一方、神隠しは市井に普通に信じられ、口から口へと伝わっていることだが、儒学の影響を受けた（或は儒学に縛られた）武家にとつて、とかく扱いにくいことではないだろうか。そうであるから、杉野家は「神隠し」というような「怪力乱神」の理由を、江戸儒学を中心である湯島聖堂に堂々と説明することを避けたのである。そして急病というあやふやな理由で大三郎の吟味を辞退させたことにしたのである。ところが、いまだに失踪中である子息の大三郎であり、さっぱり手がかりもつかめない状況の中で、忠義一途の用人・角右衛門はひそかに八丁堀の同心の屋敷へ訪ねてきて、大三郎の行方を調べることを半七に託すのである。そもそも町方の同心が武家の事件の依頼を受けることが公式のものではないが、この事件はなぜ八丁堀の同心が自ら引き受けず、半七に託さなければならぬのか。

半七は江戸社会の中で治安維持を担っていた同心のもとで私的に使役された岡っ引きである。勿論手先の岡っ引きは上司の命令に従うのが当然のことだが、それというのも、岡っ引きというのは役人でもなく、一般庶民でもない、曖昧なボジションの人たちと言える。そうした公私の一方に属さない半七は逆に江戸社会の枠組みに束縛されることなく、公に出来ない事件や庶民の間で起こった不思議な事件を手がけることができる。それに、この事件は内密に託されたことであり、更に怪異な事件であるから、非公認ながら権力を持つ半七に回すに至るのも理屈に合うだろう。それでは、半七は「神隠し」についてどう考えているのか。

作品の中で半七は「世の中にそんな不思議がないとも限らないと思っていた。そこで、それが真実の神隠しであるとすれば、とても自分たちの力には及ばないことであるが、万が一ほかに仔細があるとすれば、何とかして探し当たらない筈はないという自信もある」と語っている。半七といえども普通の人間であり、江戸の人々と同じく鬼神の存在を頭から否定していたわけではない。だが、彼には鬼神よりも人間への配慮を優先させる現実的合理主義者としての面目躍如たるものも同時に感じられる。つまり、半七は「神隠し」という「怪力乱神」の存在に眼を背ける儒学精神の持ち主ではなく、目「ころの見聞を怠らず世故にたけているという、全く別の側面からこの怪異の存在を疑っているのである。そこで、半七は旗本屋敷には世に洩れない秘密（人間の仕業）が多く潜むことに注目し、事件の核心に迫ったのである。

旗本屋敷と朝顔の特性

捜査に乗り出した半七は、中間部屋へ出入りをする物売りで顔見知りの女・お六に会った。杉野家の屋敷が近所でも評判の「朝顔屋敷」と呼ばれていることに驚く。それは真夏のことで、その屋敷の遠い先代の主人が何かの仔細で朝顔の模様を染めた浴衣を着ていた妾を手討ちにした。それ以来、朝顔が不思議にこの屋敷に祟るのであるという。調査の末、半七は事件の所以が何かこの夏屋敷の庭に咲いた白い朝顔の花から始まったことを知る。この朝顔は旗本屋敷の世に打ち明けない秘密なのである。

朝顔は漏斗に似た花卉の独特な形を持つ。夏から秋にかけて開花する朝顔は一日植物で、日の当たらない状態が約十時間続くと開花するという特性がある。そのため気候が温暖で、かつ十分に夜の長い初夏か秋口に咲くことがほとんどで、夏至前後はあまり開花しない。朝に咲き、夕には萎んでしまつのもミステリアスな美しさを感じさせる。「朝顔の花一時」という慣用語がある。朝顔の花のしほみやすいこと、移ろいやすいこと、儂いことを例えた句である。朝顔の特性は時間の設定や人物の性格に大きく影響を与え、作品全体が朝顔のこつこつ哀切極まりない雰囲気に含まれるのである。

作品において、神田の柳原堤の近所の火事のこと、大三郎が屋敷を出て湯島聖堂に向かうことも、あらゆる事の始まりが全て朝の七ツ（午前四時）頃に設定されている。この夏屋敷内に朝顔を発見したことから、吟味の新月まで晚秋頃に願書を出すことを計算し、更に又蔵の仕損じて長年仲が悪い「烏賊」（小身の子）と「章魚」

(大身の子)の争いの火をつけ、そして冬の朝の神隠し事件までの一連の騒動を、夏の終わりから秋にかけて咲く朝顔に結びつけたのが綺堂の巧妙なところだと言えよう。

綺堂はまた、一日で萎んで落ちてしまふ朝顔の特徴も生かしている。通常事件の捜査は何日も何ヶ月も時間のかかるものだが、この事件において、半七は僅か一日だけで真相を解明し、依頼人を驚かせている。十一月十六日朝五ツ(午前八時)に八丁堀から使いが来て、依頼を受け、九段の坂に登り、裏四番町の杉野屋敷の様子を探つていった。昼過ぎ、「朝顔屋敷の怪談」、「落ち着かないような平助の眼の色」、「近いうちさまとまったお金が入るといふ又蔵の噂」、この三つの要素を結び合わせて、色々考えながら家に戻る。暮れかかった頃、彼はもう一度九段の坂を上り、千鳥ヶ淵の堀端で平助と又蔵の喧嘩を目撃した。その後、半七は又蔵にカマをかけて真相を知るといふ「一日事件」なのである。

もっとも、現行の光文社文庫本には、「向こう側の高い堤の松の上にちようど今、青白い顔を出した二十六日冬の月にあざやかに照らされていた」(傍線稿者)とある。前の本文から考えてこの場面の時刻は午後七時ごろではないかと考えられるのだが、旧暦の二十六日では月の出る時刻は深夜から明け方の間で、つじつまが合わない。「朝顔屋敷」の初出(『文芸倶楽部』大正七年三月)と初刊(新作社大正十二年四月)では、両方とも確かに「十六日」と記されている。後に「二十六日」に改稿した理由は分からないが、初出の設定から綺堂は間違いない「一日事件」を意識し創作したのであろう。

ところで物語は一つ不自然な点がある。「神田の柳原堤の近所の火事」にわざわざ言及することである。作品の内容は火事とは全く何の関係もないのに、なぜ火事のことを、際立つ冒頭に書いたのか。綺堂の『風俗江戸物語』の「江戸の火事」の段において、江戸時代の火事は頻々としてほとんど毎日のようにあり、江戸の人達は非常に火事を恐れていた。更に綺堂自身も「火事は江戸の花」、「火を見れば火事と思え」というくらいに人々の神経が敏感に反応させたと言ふ。それなら、一見何の関係もない冒頭の火事のシーンは案外事件の根源 ある人の過敏な神経 を暗示にかけるがもしれない。江戸の花・火事を見て人々の神経を悩ませることに対して、杉野家が憚る花・朝顔を見て神経が震えたのは誰だろうか。

半七の調査の結果、驚いたことに神隠し事件の真相は、実は奥方の指図により作り出されたものと判明した。この夏、屋敷の庭に咲いた白い朝顔の花と屋敷に纏わる伝来の不祥事から、奥方はひどく気に病んでいた。「章魚」に復讐の機会を狙う「扁賊」は素読吟味の時、仕返そうと杉野の門前で口々に怒鳴り、奥方の尖った神経を震えさせた。そして、奥方の浅い知恵と平助の小才覚とが一つになって組み上げられたのが今度の狂言であった。この事件は表向き「神隠し」として万事を曖昧のうちに葬ってしまったが、一年後に秘密が露頭し、奥方は里へ帰され、一生日蔭の身になってしまったといふ。

息子のことを愛して神経を震わせた奥方が、全ての方法を考え尽

くして芝居をうった結果、朝顔は息子よりも母に祟った。何処までも伸びて巻き付く朝顔の蔓にはなにかの情念を感じずに居られず、空恐ろしくさえ思われる。朝顔の花弁が萎れて落ちても、蔓は巻き付いたままの姿を見るに、美少年の顔と奥方の悲惨な結末が頭の中に浮かび上がり、何とも納得の行く心地がする。更に言えば、朝顔の花の移ろいやすいことは、世の移り変わりが早いという象徴であり、諸行無常に物の哀れを感じずにはいられないだろう。そもそも半七の扱った事件全体が、天保十二年から慶応三年という武家社会の崩壊期を歴史的背景としている。物語の最後に、あんなにも栄え、そして江戸の象徴の一つでもあった武家の朝顔屋敷は時代とともに毀されてしまい、いつの間にか、無くなってしまつたのである。

注

- (1) 渡辺好孝『江戸の変わり咲き朝顔』(平凡社、平成七年七月)。
文化・文政期頃と嘉永・安政期頃と二回の朝顔ブームがあり、それを機に品種改良が大きく進んで、本来の花型から様々に変化したものが生まれ、非常な流行を見たという。
- (2) 岡本綺堂『風俗江戸物語』(寶六堂、大正十一年二月)
- (3) 「章意」文章の大意。「字訓」語句の説明。「解義」主題となる詳しい解説。「余論」他の書籍からの引用を入れた解説。
- (4) 「子不語怪力乱神」子は怪力乱神を語らず。孔子は奇怪なことを力をたのむこと、世の乱れや人の道を乱すこと、鬼神のことな

どは、口にしたり、説明はしない。

- (5) 今井金吾「江戸と町奉行所 寺社など他支配との関連」(『半七は実在した 半七捕物帳』江戸めぐり、河出書房新社、昭和六十四年九月)

- (6) 縄田一男「ミステリーとしての『半七捕物帳』」(『捕物帳の系譜』新潮社、平成六年四月)

「猫騒動」小考

松浦 光

「猫騒動」は半七の係わる四十九番目の事件である。初出は『文芸倶楽部』大正七年五月。

二月のあたたかい日に、私が半七老人の家を訪ねると、半七老人が不気味な化け猫の引き起こす騒動の話始める。

文久二（一八六二）年の芝神明宮の生姜市の終った九月二十二日の夕方、神明からほど近い裏店で、おまきという老婆が頓死する事件があった。

おまきは猫を十五六匹飼っていて猫婆と呼ばれ、近隣住民にひどく嫌われていた。やがて、おまきの飼っていた猫が長屋を荒らすので、住人達によって何度も捨てられた。しかし、猫達はおまきのもとにすぐに戻ってきてしまう。しかも、二足歩行で歩く猫の姿を目撃する住人まで現われ、化け猫騒ぎにまで発展してしまつた。最終的に猫は芝浦の海に沈められた。その七日後におまきは頭に打ち傷らしいものをつけ、頓死したのであつた。

今年で二十歳になるおまきの息子七之助は魚屋を営み近所で評判の孝行息子だつた。おまきの葬式の時、大工から事件の話を通屋熊の熊蔵が聴くことになつた。熊蔵から話を聞いた半七は事件の不自然さを怪しみ調査を開始する。すると、大工の女房お初は事件について話し出した。お初によると、七之助が天秤棒を振り上げて猫の

姿になつたおまきを殺してしまつた。だが、殺したおまきはすぐに人間の姿に戻つてしまつたと言ふ。そこで、半七が七之助を追おうとしたが、既におまきの猫を沈めた芝浦の海で死んでいたのであつた。以上が「猫騒動」のあらすじである。

初出では「猫婆」として発表されたが、初刊『半七捕物帳 第一輯』（新报社、大正十二年）では「猫騒動」にタイトルが変えられている。「猫婆」から「猫騒動」に変わるのも猫婆のおまきではなく人々に主眼を置いたのだと推測できる。また、初出と『半七捕物帳 第一輯』では「考へて見ると、怖ろしいことですよ」となっているのが、『半七捕物帳 上巻』（春陽堂、昭和四年）では続けて、「いかにお話をした『三河萬蔵』も、まあ猫騒動のやうなものです、この方が、どうも凄いやうですよ」という、「三河萬蔵」に言及する記述が加わっている。「三河萬蔵」は『文芸倶楽部』大正八年一月号に発表されたので、初出では書きようがなかつた。敢えて、「三河萬蔵」について言及する記述を書き加えていることから、綺堂は猫に対する特別なこだわりをもっていることがうかがえる。『半七捕物帳（定本）第一巻』（昭和三十年、早川書房）では、「三河萬蔵」に関する記述が完全に消え、以後全く記述がなくなつた。

「猫騒動」における化け猫

やはり、この作品を論じる上で、鍵となるのは化け猫の存在であろう。稿者は「猫騒動」を論じる上で二つの解釈を考へていきたい。一つは、化け猫が存在しない虚構であると読む解釈。もう一つは、

化け猫が存在する怪談として読む解釈だ。

なお、本稿においての化け猫とはおまきが飼っている猫達の中にいた化け猫であると定義する。もし、怪談とする場合には、この化け猫が二足歩行で歩いたり、おまきを器として乗ったものと考えらる。

そこで、横山泰子は次のように『半七捕物帳』を位置付けている。

明治以降、文明開化によって教育がすすみ、迷信が退治される時代になった時、怪談は衰退する傾向があるが、それと対照的に探偵小説は発展していくのである。かつて怪談とされていた事柄が、一般庶民にとっても怪談とはみなされなくなった時代に『半七捕物帳』は成立した。

すなわち、『半七捕物帳』が書かれた当時にとって怪談は科学的アプローチによって退治されるべきものであったのだ。この時期は、妖怪や迷信についての研究が盛んで、例えば、妖怪博士と呼ばれた井上円了は大正三年に以下を述べている。

怪談の七八分は人為的偽怪と偶然的誤怪であると思ふ、人為的とは人の故意に造りだせるもの、偶然的とは故意にあらざるも偶然誤つて妖怪と認むるものをいふのである、依て妖怪の大部分は天狗にもあらず、狐狸にもあらず、悪魔にもあらず、人なりと斷言することが出来る。

仮に化け猫が存在しないということになると、それは偽怪である。この場合、住民達から徹底的に嫌がらせを受け、おまきが発狂してしまったことにならうか。その姿が七之助とお初には偶然的に本物の化け猫が乗ったように見えてしまったのだ。

もしくは、住民全員が化け猫のせいだと噂をついて人為的におまきを殺してしまったという見方もできなくはない。一力所ではあつても打ち傷があり、医師も判断しかねるおまきの死骸に対し、住民達は殺人ではなく卒中という病死で片付けようとしている。それに、唯一の目撃者は、以前から猫に悩まされ、「どこかへ引っ越したい」と口癖のように云っていた「お初である。

つまり、住民達が嫌われ者のおまきを排除してしまおうという動きがあつたことになるのだ。そのままであれば、単なる老婆の病死で終るはずだった。そこに、半七が介入してきたことで事件へと発展したのだ。

右の見方を深めれば、半七の介入によって住民達の予想を超え、息子の七之助が親殺しとして疑われることとなった。さらに、住民達は七之助を親殺しの疑いで不名誉な磔刑になる前に芝浦の海で自殺に見せかけてしまった方が良いと考えた結果、おまきだけではなく七之助まで殺してしまつたと、推測できなくもない。

むしろ、これは可能性だけの話で、事件は半七によって科学的に解決される。だが実際は、おまきを殺したのは七之助であるということにして、事件を解決しただけであつて、化け猫については何も説明されてはいないのだ。

一方、住民が誰一人嘘をついておらず化け猫は本物であるということになるのなら、「猫騒動」は非科学的な怪談になってしまう。これは人の手では解決できない本物の化け猫の仕業によるものだ。

柴田宵曲『妖異博物館』に指摘があるように「猫騒動」が影響を受けた作品として、『耳囊』と『中陵漫録』が挙げられる。『耳囊』には猫に化けたように見えた母親を息子が殺してしまう、「猫人につきし事」、『中陵漫録』には老猫が寺僧に化ける「老猫変化」という怪談話がある。

だが、どちらの話にも猫が化けるという記述が見られるものの、老婆が猫を可愛がったという記述はどこにも見当たらない。浅子逸男もこのような言及をしている。^⑩

「半七捕物帳」では、ふだんから母親が猫をかわいがっていたため、近所にも迷惑なので捨てることにしたが、捨てたはずの猫が帰ってきてしまったという話をまくらにおき、しかも母親が猫を捨てるときの表情が、ほとんど猫と一体化しているような不気味さを前段に張っておいて、『耳囊』の話と合わせて捕物話を作りあげている。

本作では、おまきの可愛がっていた猫の中に化け猫がいて、おまきに乗憑った。化け猫がおまきの身体を器にして乗憑ってしまうことで、不気味さは増幅されていく。怪談としての雰囲気は充分だ。確かに、本文にもまるで化け猫に取り憑かれたかのようにニヤリと

笑うおまきの姿が見られる。

だとしても、稿者にはおまきの飼っている猫を排除しようとする住民ではなく可愛がっていたおまきに化け猫が乗憑って、実の息子に殺されてしまうというのはあまりにも不合理的な話のようにも感じられる。おまきの不気味な笑顔が果たして化け猫によるものかというのは本文の記述からでは誰にも分らないのだ。

半七自身、作品を通して心情は複雑に揺れ動いている。元々湯屋熊の熊蔵からおまきの死の話之又聞きすることから事件への関与が始まった。この段階でも、半七は評判の孝行息子が大罪を犯そうとは思えず少し迷いが見える。さらに、お初に聴取した時にも、「ほかの事と違って、親殺しだ。一つ間違った日じゃあ本人は勿論のこと、かかり合いの人間はみんな飛んだ目に逢わなけりゃあならない」という発言が示す通り、事件には慎重な姿勢を貫いていた。

七之助の死を知った時でさえも、悲しみや同情という感覚よりも磔刑に逢わないうちに自滅した方が、いっそ本人の仕合わせであるとさえ半七も思っていた。半七にとっても不運の親孝行息子に縄をかけない方が仕合わせだと考えたのだ。

半七の心情からも分かるように、化け猫が住民による虚構だとしても七之助が疑われた時点で誰も味方にするこもできず磔刑が待っている。たとえ化け猫が本物だとしても、お初以外目撃者がいない中、無実を実証できず七之助は親殺しという不名誉な罪によって磔刑にされてしまう。それこそ、芝浦の海で自滅するのが七之助にとって最も仕合わせなことであるのだ。だから、半七は敢えて七之

助の死については追及することはなかったようにも感じられる。

時間軸が冒頭に戻ったラストシーンでも半七は、孝行者の七之助に親殺しができるとも思っていない。また、お初も正直者で嘔を吐くような女ではないと考えている。

どちらにせよ、おまきが猫を飼わなければ「こまでの騒動には発展しなかった。半七は、はつきりしない後味の悪さにいまだに憤りの気持ちを抱えているのだ。

「猫騒動」の中の人々

稿者は「猫騒動」とは単に江戸時代の怪談をモチーフにした探偵小説やミステリーではなくその背後に広がる人間模様を描いた作品であると考える。本作の根底にあるのは江戸時代の長屋社会における住民トラブルである。

考えてみると、元々おまきは人に憎まれるような悪いことはしておらず、ただ猫が好きだっただけである。だが、おまきが歳を取るにつれ、飼っている猫の数が増えていった。

それなのに、猫に囲まれ薄気味の悪いおまきは真面目に働く七之助と比べられ、嫌われものになっていく。ついには、近所を荒らす猫達がきっかけて、おまきに苦情を言う口実ができた。そんな些細なトラブルからこの騒動は始まったのだ。

猫を可愛がっていただけなのに近隣住民から嫌われ、最後には殺されてしまうおまき。孝行息子なのに、実の母親を殺したことになるってしまった七之助。得体の知れないモノに湧き立つ長屋の住民達。

全ては住民トラブルから生み出された化け猫によって導かれる世界である。化け猫を虚構として見るか、本物として見るかで解釈はまるつきり変わってくる。そして、どちらの解釈が正解なのか分からないというのも作品の一つの面白みでもある。もしかしたら、おまきは住民達の排除により発狂してしまったり、殺されてしまったのかもしれない。または、本物の化け猫がおまきに乗憑ってしまったのかもしれない。

いずれにせよ、おまきが猫を飼うという設定がなければこの作品は成立しない。おまきが猫を飼っていたことがきっかけてトラブルが生まれ、二人の尊い命が失われたのは事実だ。

何が虚構で真実か分からない物語。まさに化け猫が招いた騒動である。その人間模様の中で半七も戸惑いを隠せずにいる。

結果として、騒動の真相が分からないことで、不幸な親子は親殺しという不名誉な裁きを受けなかった。それが本作の唯一の救いでもあるのだ。綺堂が描きたかったのはどこでも起こりうる住民トラブルから、化け猫を通して振り回される人々の人間模様であった。

注

(1) この事件で、「おまきは寛政申年生まゐ生まれの今年六十六で……」という記述があるが、これは綺堂の勘違いである。本来なら、寛政申年は寛政十二(一八〇〇)年であるから、「今年六十三歳」のはずである。

(2) 芝神明宮は、港区芝大門一丁目にある芝大神宮のことで、別名では飯倉神明宮、関東のお伊勢様とも言う。特に、九月十一日から二十一日まで「だらだら」と行われる「だらだら祭」には生妻市が立ち賑わった。また、ここで文化二(一八〇五)年の二月に起きた町火消し「め組」の鷹職と江戸相撲の力士たちの乱闘事件は「め組の喧嘩」と呼ばれ、歌舞伎や講談の題材にもなっている。

(3) 他にも初出と『半七捕物帳 第一輯』では、「初春のあたゝかい日」から「二月のあたゝかい日」に、「七之助は少し面目が悪さうに答へた」から「七之助はすこし極りが悪さうに答へた」に、それぞれ異同が見られる。

(4) 『三河萬歳』も猫にまつわる作品である。この話には、見世物用に踊るように調教された猫が化け猫に間違えられ殺されるという件がある。

(5) 横山泰子『綺堂は語る、半七が走る 異界都市 江戸東京』(教育出版、平成十四年十二月)

(6) 井上円了『新編妖怪叢書六おばけの正体』(丙午出版社、大正三年七月)。引用は昭和五十八年十月の国書刊行会版復刻に拠る。

(7) 初出は柴田宵曲『妖異博物館』(青蛙社、昭和三十八年一月)。本稿では木村新ほか編『柴田宵曲文集』(小沢書店、平成三年八月)を参照した。

(8) 南町奉行の根岸鎮衛による随筆。江戸時代の天明から文化にか

けて人々から聞き取った珍談、奇談などがまとめられている。鈴木堂三編注『耳囊』(平凡社、昭和四十七年三月)所収。

(9) 江戸後期の本草学者である佐藤中陵による随筆。諸国で見聞した雑事や奇談が載っている。日本随筆大成編『日本随筆大成(三)』(吉川弘文館、昭和五十一年十二月)所収。

(10) 浅子逸男『江戸残党後日傳』『半七捕物帳』の世界』(国語と国文学 八十四(十二)) (至文堂、平成十九年十二月)